

325  
209

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



學師高富士圓治演



講  
話

希聲堂遺稿





高富士圓治師小照

乐邦還 追悼

高子為士學所以天折

阮元朱生奉陳文煊



業成何事現痾  
瘰今也則亡淚自  
潛三十八年化  
緣未堪悲獨向

乐邦還 追悼

高子學以之天折

臨米生李隆文旌



緒言

人生最大の遺憾は、多年尅苦勉強して學問しながら、其の學んだ所を以て世に施し人を救ふこと能はずして、空しく死去するに越した事はあるまい。我が高富士圓治君の如きも、たしかに其の一人である。

君は豊後の人で、幼時より僧侶となつて布教傳道に従事したいといふ志があつた。成長して豊後大分郡東植田村の西福寺の衆徒となつて得度し、後本山の布教使補となつて専ら九州地方で布教をして居たが、其の學ぶ所淺くしては、人を利することも亦尠い

と心附いて、廿三歳で東京の眞宗中學に入り、牛乳や新聞の配達もし、人力車も挽き、其の他あらゆる労働をして學資を得て勉強したが、明治三十五年の夏肺病に罹つた爲に、一時廢學して、房總の地方に病を養ひ、少しく癒えて後再び入學し、廿七年に卒業し轉じて眞宗大學に入つた。

眞宗大學に入つてからは、學資を得るために説教もする、雑誌の寄書や編輯もする、後には學校内で烟艸賣までして學資をつけた。其の後世話する人があつて、筑後の某寺に養子となつたけれど、家庭の折合がよくなって程なく離縁して、又元の苦學生活に戻つたが、學友の補助やら布教やらで纔に學資を得て、四十三年

七月を以て眞宗大學第十六回の卒業生として、學師の稱號を得、尋で布教使にも補せられた。

夫からは、東京横濱等に布教して居たが、年來の痼疾は屢々君の活動を妨げ生計困難ならしめた。四十四年十一月に至つて、府下荏原郡大井町に一家を賃して希聲堂と名け、こゝを根據地として、漸次府下各地に教線を張る希望であつたが、四十五年の夏に至り、病勢大に進み布教も思ふまゝにならず、貧苦と病苦のため到底永くは生きられぬ者と覺悟された者と見えて、或日余を訪ひ後事を託せられた。

余は元來高富士君とは知己の間柄ではなかつたが、君が中學時

代發病の時、或人の話に依つて君の境遇の悲惨な事を聞き、一度君を淺草區松葉町なる無料宿泊所に尋ねて慰藉したのが縁となつて、眞宗大學在學中も多少の學資を補助した位な事で、深い關係があつたではないが、君が形影相弔する身を以て、來つて死後の事を托せらるゝに至つては、余も亦之を辭するに忍びないから、快く之を引受け、又病が今より一層重くなつて生活の道の絶えた場合には、何とかして進ぜやうと約束した。此の時君は潜然として涙を流し、何分宜しくお頼み申しますといはれたが、平素狷介にして人に下らぬ君が、此の一語を吐いた時の苦痛は如何であつたらうかと思ふと、今も余は暗涙を禁ずることが出来ぬ。

こゝに於て余は加藤智學、金森諦成二氏と相談し、君の學友知己や同行に頼んで、病氣養生の費用の義捐を乞ふたが、是より先希聲堂の家主たる岡本宇兵衛氏と、大井町元芝に住居せらるゝ木村眞三郎氏とは、特に君に同情し木村氏は月々巨額の生活費を惠まれ、岡本氏は其の妻君と俱に、朝夕付切りで親身も及ばぬ介抱をしてくれられた。

此の二大同情者と、市内及び府下の同行衆や、君の學友山邊習學、赤沼智善、柏原祐義等の諸氏が尠からぬ義捐金をしてくれられたのと、澁谷淳藏、田中政八氏等の紹介で醫師奥山伸氏が、診察投薬ともに無料でしてくれられたので、君としては實に豫想外



な手篤い看病を受けて、同年十一月十九日に往生した。

君の一生三十餘年の歴史は實に此の如く悲惨であつた、就中君が多年の尅苦を以て、眞宗大學の業を卒へて、此から其の學んだ所を以て充分に教化を施し、多くの人をして一味の安心に住せしめて、浄土往生の素懷をとげさせやうと豫期して居たのが僅々二年有餘で死亡したのであるから、君自身が残念であつたばかりでなく、余輩友人としても、實に残念千萬である。

夫故余は何とかして君を紀念すべき事業をなし置きたいと思ふて、加藤智學氏とはかり、君が大學に居られた時、余が監督せる『法話』に寄稿せられた、『選擇集十六章段法話』といふを輯めて『選

擇集講話』と名けて、今回出版する事にした。

是は一には、君が多年の志望であつた布教傳道の一端を、せめては世に傳へたく、二には君が病中に多額の義捐金をしてくれた道友や、同行衆へお禮に代へたのである。斯して余は高富士君より托されたる後事を、不充分ながらも盡くしたつもりである。

併し君の抱負は此の如き泛々たる小冊子では満足はせられまいが、何分命が短かつたのであるから出来なかつたのである。けれども君は早に他力の大信心を決定して居られたから、今頃は最早浄土から還相回向に、ごこそへ生れて居らるゝかも知れぬ。果し

# 選 擇 集 講 話

立 談

學 師 高 富 士 圓 治 述

平 松 理 英 校

古語にも流を酌んで本源を尋ぬると申して浄土真宗にお流を酌む者は元祖法然聖人を知らねばならぬといふことは申す迄もない事でありませぬ。其の元祖聖人を知るには此の選擇集といふ御聖教を聴聞すれば御一代の御化導は悉く此の中に收りてあります。然らば選擇集には如何なる事をお示し下されてあるかといへば書物は本末二卷ありて段は十六章と分れてありますけれども只一言にいふて見れば廣

立 談

一

て然りとせば、君が今後の化益は、大學卒業位な事ではなく、これほど廣大であるかも知れぬ、宗祖大師のたまはく、

安樂淨土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、

釋迦牟尼佛のごとくにて、利益衆生はきはもなし。

大正二年十一月初二日

道 友 平 松 理 英 誌

余が此の稿を舂して印刷せる後、君の親友山部君より『精神界』に掲げて君を弔したる文を、加藤君より『月影』に載せたる君の逸事を贈り越された。此の二文で、愈々君の閱歴と性行とが明瞭にわかるから、卷末に附録して、高富士君を知らずして此の書を読む人の参考とする事とせり。

理 英 再 誌

立 二

立といふ二文字に収ります。廢とはすてゝる事。立とはゝる事。廢る者は定散自力の諸行であつて、取る者は他力念佛の一法であります。然しながら、此の定散自力の諸行を廢て、弘願他力の念佛を取れとの元祖聖人御一代の御教化は、決して元祖の私ではなくて、偏に善導大師に御依りなされたのであります。

併し善導大師も、亦私に之を仰られたではなくて、全く釋尊の御指南にお依りなされたのであります。即ち觀經の流通分に至りて、佛阿難に告げたまはく、汝好く是の語を持て、是の語を持てといふは、即ち是无量壽佛の名を持てとなりとありまして、今まで阿難尊者と韋提希夫人に對して、長々とお説きなされた定善十三觀、散善三觀をば、惜氣もなく捨て、仕舞て、唯念佛の一法をば、阿難尊者に御附屬なされてあります。此に依りて善導大師は、定散の諸行を捨て、念佛の一法を立て、遠く之

を未代まで傳へたいといふ、釋尊の御意を承けさせられて、此の經文を散善義に上來定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるにありと御決擇なされてあります。

併し釋尊とても、亦釋尊の私でお説きなされたではなくて、全く彌陀の御本意に基かせられたのであります。阿彌陀如來が、法藏因位の時、世自在王佛の御許に於ての選擇が、是より外はありませぬ。斯くいただいて見ますると、釋尊は彌陀の本意を承けさせられ、善導は又釋尊の御本意を承けさせられ、法然聖人は善導大師の思召を承けさせられ、吾祖聖人は無論元祖聖人の意を承けさせられたのであります。

爰が有難い所でありまして、當流に於ては七高僧を相承する外に、又二祖相承といふことを立てます。二祖相承と申すは、釋尊と吾祖との

立 談

三

支 談 四

間に善導大師と法然聖人の二祖をはさむのであります。全體此の相承といふ事は、無我といふ事を顯すのでありまして、自己の我見をばらぬ事を顯すのであります。其の無我に教義上の無我と、信念上の無我とがあります。七祖相承といふは、主として教義上の無我を示す側であつて、別に一宗を開くには其の根本の教義に於て相承する所がなければなりません。此は一般にあるべき事でありまして、今二祖相承といふ事は、主として信念上の無我を示す側であります。即ち歎異抄に「彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言あるべからず、佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず、善導の御釋まことならば、法然の仰そらごとならんや、法然の仰まことならば、親鸞がまうすむね、またもて、むなしかるべからず候か、詮するところ、恩身が信心におきてはかくのごとし」と仰られたのは、全く吾祖御開山が彌陀

べなされたのであります。

又元祖の廢立の義を御相承なされた處は、淨土眞宗の礎たる御本書六卷を拜見すれば、只題號を見ればかりでも、教行信證の四法には、それ〴〵眞實教眞實行等と眞實の二字が冠らせてあります。又次の眞佛土卷は、土は報土にして、佛は報佛なることを示し、最後の一卷は、方便化身土卷と題して、方便の二字を冠らせて諸行往生の機の落付く先は、佛は化佛にして、土は化土なることをお示しなされてあります。此が元祖の廢立の義を承けさせられた、吾祖の眞と假との分ち方でありまして、覺如上人から承りても、眞宗に於ては、いくだひも廢立といふ事を以て先とせられたりと仰られてあります。

倍此の如くいたゞけば、吾祖の一宗開闢は、全く選擇集にお據りなさ

れた者でありますから、流を酌んで本源を尋ねんと欲する者は、私共僧侶は勿論、此の選擇集を學ばねばならぬ事でありますが、お流を酌む在家の皆様も、六ヶ敷講釋は聞かすとも、御慈悲を喜ぶ助縁として、元祖御一代の御化導を聴聞して、共に御法義を味いたい事でありませぬ。そこで、此から選擇集の御話に取懸ります。尤も學問としてお話をする事ではありませぬから、此の選擇集の章が十六段に分れてあるのを、一章々々に就いてほんの意味の大體だけをざつと御話して参りたかと思ひます。其の前に先此の選擇集は、どうして御制作なされたかといふ事を、一言御話して置きましょう。

此の選擇集は、一ツには開宗立教のためでありまして、末代下根の私共には、淨土他力の法門こそ、時機相應の法なれといふ事を示し、二ツには自信教人信の爲でありまして、元祖は源信和尚御入滅の後、一百十六

年を経て、美作國久米南條稻岡の庄に生れたまひ、智徳衆にぬきんで、一切經を五遍までお讀みなされたけれども、智徳にては出離の要道を求め難く、非常に御煩悶あらせられた事でありませぬ。後源信和尚の往生要集の御紹介によりて、善導大師の觀經の御講釋(四帖の疏)を三回迄御熟讀あらせられて、最後に遂に彼の「一心專念彌陀名號」の法こそ、我が出離の要法なれとお悟りなされてより、同じ感喜の法味をば、遍く一切の人に分ちたいといふ思召の外はありませぬ。さりながら、洪鐘響くといへども、叩くを待つて鳴るの風情で、叩きてがなければ鐘も鳴りませぬ。其の叩きてといふは、外でもない、月輪殿下であります。前關白兼實公が、元祖に對してお願いなさるゝには、私は日頃あなたから念佛の法門をお聞かせに預りて、有難い仕合に存じますが、右の耳から聞けば左の耳に抜けて仕舞様な、機根下劣の私でありますから、何卒御面倒な

八  
がら淨土の法門を紙に認めていた々は、取出して拜見して御慈悲が喜ばれますからと、此のお求めに應じて、元祖聖人が元久二年御年七十二歳の時、西山に善慧房をば勘文の役と申して、選擇集御製作につき、そこやかしこの經釋の文の肝要なる處を引出す役目を勤めさせ、安樂房には筆を執る役目を勤めさせて、出來上つたのが、此の選擇集であります。

ところが如何に關白殿の願ひ故とはいへ、三百餘人もある御弟子の中に、出家のお方を差置いて、在家の兼實公のために、大切な聖教御製作とは如何なる譯かといふに、此には思召があります。其の思召といふは、本願の正機を顯さんがためであります。其の本願の正機を最も善く顯し、本爲凡夫兼爲聖人の旨を最もよく説いたものは、三經の中で、觀无量壽經であります。觀經は韋提希夫人の請に應じて説きたま

へども、然も韋提希夫人は相伴人となりて却て未來の一切衆生が正客となつて居ります。阿彌陀經は舍利弗が三十六遍まで呼出されてあるが、然も遠き未來の一切凡夫の代表者になつて居ります。今も兼實公の御願いを縁として、未來の肉食妻帶の泥凡夫に相應したる、彌陀の本願を知らせんためであります。直段が安くて品物が上等なら、誰も買はんとする。花が奇麗で梢が低くければ、誰も折らんとする。淨土の機縁あらはれて、日本一州ごとく、元祖の御化風に靡かんとするのであるから、一方には反對者の嫉みは免れない。大原問答もこれがためでありました。起請文の誓約もこれがためでありました。公胤の決疑鈔も選擇集を破せんがため、栴尾の明慧上人の摧邪輪もこれがため、定照の彈選擇もこれがため、日蓮の立正安國論も多くは之がため、日蓮の無得道論もこれがため、將又承久元年の念佛停止も御流罪もこ

支 談

れがためである。併し風當りの強いのは木が大なる所以であります。選擇集に對して斯くも反對風の強きによりて、ますく淨土の法門の勝れたる事が知らるゝ道理で、遂に宮講といふて後柏原天皇の御時代には、宮中に於て陛下に對し奉りて、此の選擇集の御講釋を申上げる様との勅命を賜るに至りました。恰も此の時が元祖聖人の三百年の御遠忌の時でありまして、後柏原天皇より通命國師といふ諡號を賜りました。これより今の明照大師といふ諡號を賜るに至るまで、前後數回の諡號宣下といふ事は、他の祖師に例のない事でありました。そして、又宮講に於ては、經文及び釋文の講釋も度々ありましたが、經文では、舒明天皇の時、淨土の大无量壽經の御講釋が、一番最初であつて、釋文では、元祖の選擇集が、第一の初であつたといふ事も、決して偶然の事とは思はれませぬ。

一〇

支 談

斯る尊きお聖教であるから、元祖の御時代に於て、三百餘人の御弟子の中に於て、此の御聖教を直接に、元祖から授かつた方は、僅に四五名であります。此を我が御開山は、化土卷に「年を涉り日を涉り、其の教誨を蒙るの人千萬なり」といへども、親といひ疎といひ、その見寫を獲るの徒甚だ以て難しと仰られてあります。然も此の僅の人の中でも、或は皮を受けられた者もあり、或は肉を受けられたものもあり、ましようが眞實に元祖の骨髓を受けたものは、吾祖御一人に限ります。此の御器量を見込ませられたればこそ、元祖聖人が吾祖御開山に選擇集を御附屬なされ方は、外の人に異りて、甚だ御丁寧でありました。即ち選擇本願念佛集内題の字并に南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本釋々空と空の眞筆を以て之をかゝしめたまひきと仰られて、元祖の御眞筆を以て、表紙の内題號と御名とを書いて御授けなされた事は、吾祖聖人にとりては、餘程の

一一

支 談

御面目であります。「仍りて悲喜の涙を抑へて、由來の縁を注すと冥加の程が身に餘りて喜泣きをなされたとあります。斯く感極りて涙にむせばせられた吾祖の御喜をお流を酌んだ私共は、一層喜ぶべき事でありませぬ。吾祖聖人によりてこそ、元祖聖人の真髓をいたやくことが出来ました。元祖の真髓は善導の御意であり、善導の御意は直に佛説であり、佛説は直に彌陀如來の勅命であります。彌陀釋迦善導法然と相承すれども同じく彌陀より賜つた無我の信念なれば、一器の水を一器に注ぐが如く、阿彌陀如來と私共の間には、毫髪の隔てもありません。風が風に吹かれて、西や東に飛廻りても、糸さへ切れねば、持人の手に歸るが如く、煩惱の風に吹かれて廿五有の空を永々迷ひ歩行しました私共が、今は彌陀大悲の糸を附けられたれば、此の度こそは息切れ次第に、彌陀法皇の御手許に引附けられるといふ仕合は、全く祖師の御恩廻りて

三

は、元祖の御恩澤と深く仰がねばなりません。

選擇本願念佛集

此の七字が此の御聖教の題號であります。此の題號に就いて、少し御話致しますよう。

さて、釋尊の一代教をどこまでも煎じ詰めた淨土の觀无量壽經の上にて、定散諸善を振捨てて、唯弘願念佛の一法を立て、一生作惡の凡夫をして、最勝高妙の報土に往生せしむる事は、偏に善導大師の御判釋であります。元祖聖人は、此の善導大師の廢立の思召を受けて、聖道の祖師方にいやといはさず、右も左も前も後も自力聖道の真中に、易行他力の淨土門を開かせられた其の御書物が、此の選擇集であります。選擇と題號を選擇本願念佛集とお名づけなされたものであります。選擇と

選擇本願念佛集

一三



いふは下の本願章に取捨の義なりといふ御釋がありて、選取り選捨つるといふ事で、即ち大經に在る攝取二百一十億の攝取であります。法藏因位の昔に於て、十方淨土の其中より、最悪を選捨て、善妙を選取り、不足や小言のいへない様に、御成就なされたればこそ、韋提希夫人も「我今樂生極樂世界」と光臺現國の其中に、安樂世界を選んだのは、韋提希夫人の自力でなくて、全く彌陀因位の選擇本願の顯れであります。其の彌陀の淨土へ往生するに就いては、外の諸佛の淨土の如く布施を以て參るでもなく、持戒を以て往くでもなく、只持ち易く稱へ易き名號を案じ出したまひて、之を以て凡夫往生の正定業とお定めなされたれば、雜行雜善をなげすて、只念佛の一行でなければならぬと、廢立の正義を顯すために、此の選擇のお言葉を用ゐさせられたのであります。念佛集とは、月輪殿下のお願に應じて、更に聖人の私を雜へず、に幾多

の經釋の中から念佛の要文を集めたものであるとのお意であります。今此の七字の題號を只一口に申しますと、第十八願の念佛を明した書物といふ事でありませぬ。元祖は一願建立と申しまして、第十八願を王本願と名づけ、餘の四十七願を欣慕の願と名づけさせられ、網の大綱を引けば、すべての小目は必ず附いて上るが如くであります。故に選擇本願といへば、必ず第十八願の事でありませぬ。題は一部の總標と申しまして、帽子の看板を見れば、其の店は帽子商なることが知られ、足袋の看板を見れば、其の店は足袋商なることが知られるが如く、此の御聖教中十六章段に述べたまふ所は、選擇本願念佛集といふ七字の題號に全く顯れて居ります。本末二卷十六章の御化導も、第十八願の念佛より外はありませぬ。今其の譯を御話するに就いて、ざつと數へあげて見れば、

選擇本願念佛集

第一教相章 は、聖道の難を廢して淨土の易を立てたまふ御化導であります。

第二二行章 は、雜行を捨て、正行を立てたまひ。

第三本願章 は、彌陀の選擇本願を明させられ。

第四三輩章 は、念佛と諸行とを並舉げ、念佛を立てんがために、殊更に廢の諸行を説くとの御示し。

第五利益章 は、其の諸行を選捨て、念佛の利益を讚嘆したまひ。

第六特留念佛章 は、末法萬年の末獨念佛のみを留めたまふ事を示したまひ。

第七攝取章 は、彌陀の光明は餘行の人を照さず、唯念佛の衆生のみを攝取したまふ事を示させられ。

第八三心章 は、念佛の行者は必ず三心を具すべしとの御化導。

選擇本願念佛集

第九四修章 は、三心章と二行章とに於て、安心と起行とを明し終りたれば、此の章にては作業の四修を明させられ。

第十化讚章 は、來迎の化佛が、念佛の行者を讚嘆したまひ。

第十一讚嘆章 は、釋尊が念佛の行者を讚嘆したまひ。

第十二附屬章 は、定散の諸行を選捨て、唯念佛の一行のみ阿難尊者に附屬したまひ。

第十三多善根章 は、雜行雜修は少善根なり、念佛こそ多善根なれとの御化導。

第十四諸佛證誠章 は、念佛を疑ふものに對して六方恒沙の諸佛の證誠を示し。

第十五諸佛護念章 は、念佛を信する者を諸佛が護念したまひ。

第十六名號附屬章 は、念佛の利益遠く末代まで及ぶ所の流通附屬

の義を明したまひし者であります。さて、斯くの如く並べて見ると此の十六章が、七字の題號の中に悉く攝るといふ事が知れましよう。先念佛集といふ念佛の二文字に、第一の教相章と第二の二行章が攝ります。其の故は、第一教相章の御化導は前佛の釋迦如來には三千年も生後れ後佛の彌勒には五十六億七千萬年も先つて生れたれば、恰も無佛の中間なり。殊に時は末代機は下根良薬も病ひに相應せざれば、益なきのみにあらず却て害あり。結構な聖道自力の法門も今日末代下根の機には、逆も修行の叶ふべき事にあらず。只念佛の一法こそ、時機相應の法ぢやぞとお示し下され。第二の二行章は雜行と正行とを並擧げて、雜行は淨土の行に非ざる故に、早く自力雜行を捨て、正定業たる稱名念佛に歸せよとある御勸めであります。されば此の二章は念佛の二文字の中

に攝るといふ事がいたゞかれましよう。さて第三の本願章から第十六の名號附屬章までは、選擇本願の四字に攝ります。一部十六章悉く選擇本願に離れた事はなければ、正しく選擇本願を明させられたは、後の十四章であります。其の故は元祖聖人は、此の選擇集に七選擇といふ事を立てさせられて、淨土の三部經の上に、彌陀、釋迦、諸佛の三佛の選擇を分けさせられてあります。その御理を聽聞して見れば、どうでも、こうでも彌陀選擇の本願に歸せずには居られませぬ。先、第三の本願章は正しく第十八願を明させられたれば、經は大无量壽經にして、佛は阿彌陀佛である。しかも若不生者の御誓は、法藏因位の昔に於て、彌陀が衆生に對するお約束なれば、此の本願章は彌陀選擇(二)の根本であります。第四の三輩章は、大經下卷の三輩段に於て、第十

九の願成就の相を説いて、次に念佛と諸行とを並擧げたれども、第五の利益章に至りては、全く諸行を選捨て、一念大利无上功德といふ流通の文を擧げて、念佛の利益を御讃嘆なされ、勞少くして利益の多きは、誰も望む所ぢやないかなまじひに萬善萬行に手を出して、再び不覺を取るなよと、御懇ろにお諭しなされたのが、釋迦の選擇讚嘆(二)であります。第六の特留念佛章は、同く大經の流通分に據らせられ、經道滅盡の末までも、獨念佛の一法のみを留めたまふ釋迦の選擇留經(三)を御示しなされてあります。

第七の攝取章から第十二の附屬章までは、觀經にお依りなされてありて、攝取章は、觀經の眞身觀の念佛衆生、攝取不捨の文を引き、彌陀と念佛の衆生とは切つても切れず、離すに離されぬ縁あれば、親しく念佛の衆生のみを、攝取したまふ事を明させられてあれば、是正しく觀經に於

ける彌陀の選擇攝取(四)であります。次が觀經の文を引かせられての三心章あり。其の三心章より、四修章が出て來て、第十の化讚章に至りて、汝佛名を稱するが故に、我來りて汝を迎ふとある下上品の文を引かせられて、彌陀の化佛が念佛の行者を讚嘆したまひたは、彌陀の選擇化讚(五)であります。次に十一、十二の二章に至りては、觀經一部に永々と説かせられた定散の諸行を全く捨て、唯念佛の一行ばかりを御讚嘆あらせられ、阿難尊者に之を附屬したまひたが、釋尊の選擇附屬(六)であります。上來長く説いた定散の諸行は、念佛に對すれば、月待つ宵の手ずさみであつたぞとお知らせなされる。

夫から第十三章より第十六章までは、阿彌陀經にお據りなされ、六方便沙の諸佛方が舌を揃へての選擇證誠(七)少善根の諸行を捨て、多善根、多功德の名號を持つてよと、勸め加之釋尊は、我是の利を見るが故に、此

の言を説くと實地經驗の上で勸めるぞやとの仰なれば、なんと大丈夫な有難い事ではありませぬか。

サアこれで七選擇の大略がお解りになりましたでしょう。然れば選擇集十六段、悉く七字の題號に攝るといふ事もお解りになりましたでしょう。然るに此の七選擇の中、第一の選擇本願を取りて、題號とされた譯は、第一の選擇が根本であつて、餘の六選擇は枝末であります。枝葉を根幹に歸すれば、餘の六選擇は、悉く第一の選擇本願に攝まつて仕舞ます。夫を今題號に顯して、選擇本願念佛集と標し、擧げられた物であります。

嗚呼此の選擇本願は、五劫の御思惟で案じ出し給ひしもの、蓮如上人は御文の上に、それ五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふもたい我等一切衆生をあなたがちに助けたまはんがための方便に、阿彌陀

如來御辛勞ありて、南無阿彌陀佛といふ本願をたてましくて等と仰られて、此のお六字は彌陀果上の萬徳である。親の財産は子の財産、彌陀の萬徳はやがて衆生の萬徳となる。如何にして、此の萬徳を我等にあたへて下さるかといへば、佛は慈悲を以て聲として、聲を以て廻向したまふ。如何なるお呼聲かといへば、末代の凡夫罪業の我等たらんもの罪はいかほごふかくとも、我を一心にたのまん衆生をば、かならず救ふべしと仰られたりといふお呼聲であります。本願の念佛を妨ぐる程の悪もなく、本願の念佛に勝る程の善もなければ、悪はあるなり善はないなり、善悪あるなしの思案はやめて、六字のお誠を貫ふばかり、彼やこれやと案じた胸に心おきなくごつさり、と本願力に絶りなさい。自力の財産あらん限りは、曾無一善となげ出して、斯る機までもお助は全く彌陀選擇本願のお力ぞとす、まねばなりません。

南無阿彌陀佛

念往生之業  
念佛為本

此の十四字は、題號の次にありて、選擇集一部の眼目ともいふべき最も肝要なる文字でありますから、今回は此の十四字に就いてお話を致します。

さて選擇本願念佛集といふ題下に、南無阿彌陀佛といふ六字を標し擧げられたは、如何なる思召であるかといふに、此には三ツの義があると申す事でありませう。其の三義とは、第一には歸敬の通規に準ずるといふ事で、曇鸞大師の讚阿彌陀佛偈に倣はせられたのであります。讚阿彌陀佛偈も、やはり此の通り、題號の次に、六字が標し擧げられてある。此の六字を標し擧げさせられたのは、歸敬の意を申して、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸するが如く、動靜已にあらす出沒必ず故ありと申

して、忠臣や孝子は、出るにも這入るにも、親を忘れず主君を忘れず、事なす事必ず父母に告げ主君に言上するが如く、曇鸞大師も御親の御名を標し擧げて、知恩報徳のために、此の偈を作りましたといふ思召である。今元祖聖人も、それに倣はせられて、是迄釋迦一代の經文に眼をさらさせられたる事前、後五回におよびたれども、解脱の徑路を見出たまはざりしが、最後に善導大師の「一心に専ら彌陀名號を念じて行住坐臥時節の久近を問はず、念々捨てずんば、是を正定業と名く、彼の佛願に順するが故に、の文に見當りたまひ、ハタと横手を打たせられ、嗚呼此の善導大師の御指南こそは、此の法然が出離の要法なれと、悟りたまひしより以來、出るにも南無阿彌陀佛、入るにも南無阿彌陀佛、行住坐臥全く六字名號中の御生活なれば、一切の法門を述べたまふにも、一篇の御消息を認めたまふにも、何として此の御親の御名を忘れたまはんや。

依つて、今も曇鸞大師の例に倣はせられ、且諸經論の御定りでありますから、歸敬のために、此の文字を標し擧げたまふといふ義であります。

二には念佛の體を標せんがためとありまして、題號に選擇本願念佛とある、其の念佛とは、如何なる念佛であるか、念佛にも種々の念佛があるから、今は夫等ではない、選擇本願の稱名念佛である、選擇本願念佛の法體を示して、南無阿彌陀佛と標し擧げさせられたのであるといふ義。

三には、一部の所詮を示さんがためとありまして、選擇集一部十六章は、詮する所南無阿彌陀佛の一名號より外はない。元祖聖人が和語燈錄に、源空が目には三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛なりと仰られたは此の味であります。

次に六字の下に、往生之業念佛爲本の八字がある。此處を能くいた

だかねばなりません。總じて念佛といふに就きましても、多くの經論にある、念佛の種類を集め來ると四種あります。第一は稱名念佛第二は觀像の念佛、第三は觀想の念佛、第四は實相の念佛であります。始に稱名念佛とは、佛名を稱ふる事、次に觀像の念佛とは、佛の繪像木像等を觀する事、復其の次に觀想の念佛とは、更に進んで眞の佛の相好を觀想する事、終に實相の念佛とは、一切諸法無差別平等の理を觀じ、流るゝ水も空吹く風も、花も鳥も山も川も、皆一實眞如にして、悉く是佛陀なりと觀する事であります。此の四種の念佛は、つひでの如く淺より深に入る次第であります。然るに今元祖の勸め給ふ所の念佛は、第一の稱名念佛でありますから、淺深の次第からいへば、一番淺い念佛であります。併し淺いからとて劣つた念佛といふ譯ではない、修する行者の機邊からいへば、觀想の念佛も實相の念佛も出來る機ではない故に、行者の持

ち易く稱へ易き名號を案じ出したまひて、一切の功德を此の名號の中に封じこめて、信じて稱ふるばかりで與へるぞやと、誓はせられた萬機普益の念佛なれば、此の稱名念佛こそ、凡夫往生の正定業であるといふ事が「往生之業、念佛爲本」の八字であります。此の稱名念佛を元祖聖人は「もろこし我朝のもろこしの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念のこゝろをさとりて申す念佛にもあらず、たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して、疑ひなく往生するぞと思ひとりて、申す外に別の仔細候はずと仰られてあります。併し稱名念佛なればとて、信を離れたる念佛ではない、信と行とは一體のもので、第十八願他力の念佛なれば、諸善萬行と肩背を並べた第十九の願の念佛や、自力稱名の第二十の願の念佛とは大違ひである。十九廿の願の念佛は、行者廻向の法である。第十八願の念佛は、彌陀廻向の眞實信心の稱

名であります。そこを御開山は眞實信心の稱名は、彌陀廻向の法なれば、不廻向となづけてぞ、自力の稱念きはるゝ。と示したまひ。又慧燈大師は、此の和讃の心を御一代聞書に「彌陀のかたより、たのむ心もたふとやありがたやと念佛まふす心も、みなあたへたまふが故に、とやせんかくやせんとはからふて、念佛申すは自力なれば、きらふなりと仰さふらふなり」と御講釋なし下されて、彌陀を憶念する信相から顯るゝ稱名念佛なれば、とやせんかくやせんとはからふて稱へる様な、恰も人なしの原野で迷子が、他人に救ひを求むる様な、力のない危い念佛とは違ひます。往生の約束は、信の一念に調ふたれば、其の上の稱名は、信後の稱名。既に信後の稱名なる故、御當流では、これを憶念の稱名と名づけます。さりながら、選擇集の當相でいへば、念佛爲本の念佛は、稱念の念佛であります。そこで南無阿彌陀佛のお六字は、題號の念佛の體を



南無阿彌陀佛  
三〇  
擧げたもの。「往生之業念佛爲本」は、選擇本願念佛の題號をお講釋なされて、佛號を稱するのが往生の業因ぢやと、お知らせ下されたのであります。

これで先づ十四字の意味はいたゞかれたやうだが唯こゝに不審といふのは元祖は念佛爲本とありて、往生の業因は口稱の念佛ぢやとある。然るに吾祖御開山は信心爲本と仰られて、往生の業因は信心ぢやと仰られる。かくいたゞくと、吾祖聖人はどうやらお師匠の御化導に背かせられてあるやうではないかといふ疑問があります。此處が宗學の上では一寸論題になつて居りますし、委しくお話致し度もありますが、夫ではあまり長くなり、又次の教相章に移りてお話致したいと思ひますから、今はザットお話して置きます。

さて念佛爲本と信心爲本といふ事に就いて互に一方づつを兩祖に

負はして、そして此方からながめて、元祖は念佛爲本で、吾祖は信心爲本と片付けて仕舞て居る様な見方がある。是は甚だ間違つた考であつて、此では愈々吾祖を元祖に背かせて仕舞事になる。夫かと思ふと、又一方には、イヤ豈夫、元祖と吾祖と違つてたまるものか、念佛爲本も信心爲本も全く同じものぢやと、一も二もなく同じ事ぢやと考へて居る。是も亦間違つた考であつて、此では兩祖御一代折角の御化導が滅茶滅茶になつて仕舞。同なる點は同なりとして異なる點は異なりとし善く其の義理あいを考へていただいてこそ、兩祖の御化導の苟且ならぬ御骨折がいただかれる事でありませう。

然らば先づ其の異なる點から申しますと、口に稱ふる念佛と、心に信する信心とは、既に口業と意業の差であるから、義筋でいへば、念佛と信心とは違ふ、又同なる點からいへば、念佛も信心も、共に選擇本願の一六字

中のものなれば、體の上からいふと全く同じものであります。次に又兩祖の御化風の上から、同異の點を伺つて見れば、先同なる點からいふと、元祖にも信心爲本のお勸あり、吾祖にも念佛爲本のお勸があります。元祖の信心爲本の御勸振りと、此の選擇集十六章の中にも、殊に肝要なる三心章には、文旨、文義、文相の三に分ち、其の主要なる文旨の中に「生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能入とす」と明に信疑の得失を擧げさせられたは、單行無信に對する信心爲本の御勸である。其の他和語燈錄の中におきましても、三心なくては往生は叶はぬぞといふ事は、幾度も繰返されてあります。又吾祖の念佛爲本のお勸振りと、は、歎異抄に親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰を蒙りて信するほかに別の仔細なきなり、又尊號眞像銘文の中には、往生の正因は念佛

を本とすたまふすみことなり、正因とまふすは、生るゝたねとまふすなりとのたまへりともあります。これが兩祖御化風の上の同なる點であります。

又異なる點で申しますと、元祖は諸宗のたゞ中で淨土宗を開宗なされた故、聖道門に對する必要上から、自餘の諸行も悪くはないが、末代濁世の今日には、念佛こそ根機相應の法なれと、行と行とを相待して廢立を明にして、念佛爲本と仰られたのであります。ところが元祖門下の多くの人は、元が聖道自力の修行をなされた僧侶故師の聖人の御意を酌得られず、他力の信に昏くして、行に止りて眞の佛意を知らず、鎮西では二類各生を唱へて、萬善諸行も往生の正因とゆるし、西山では念佛胎内の功德などといふて、是亦萬行諸善を勸め、兎角自力作善の捨てやらぬ人があつた故、茲に於て吾祖聖人師の眞意の廢行かん事を歎かせ

南無阿彌陀佛  
三十四  
られて浄土各派の異派に對する必要上行信相待の義相を以て、信心爲本と叫ばせられたのであります。されば御本書六軸も信卷に限りて別序といふのがあり然も本末二卷ありて他の教行證諸卷に殊る點は、別して重く信を勸めさせられた、おやるせのない御化導といふ事がいただかれます。

是で一ト通りは、お分りになりましにでしよう。元祖の方では大に判じて行々相待を立てさせられ諸善萬行と念佛とを較べたなら、是非とも念佛を本とせねばならぬと仰られ、吾祖は細に判じて信行相待を立てさせられ、萬行を廢して念佛とまでなつたは結構ぢやが、信なしの念佛では元祖の御意に背くぞやとの御化導である。つゝまる所は、元祖の念佛爲本は、信を離れた念佛爲本でなく、吾祖の信心爲本も行を重んぜざる信心爲本ではない。唯是兩祖の御時代に於て、其の時勢の要

求に應ずる必要上から、初に念佛爲本を主張し、後に信心爲本を唱へたまひしのでありまして、全く御化風の異なる而已であります。どうか皆さん兩祖の御意を酌得て、まず御化導の御恩を喜ばねばなりません。

### 第一 教相章の上

さて此の十六章段は一章々々に就いて、皆出文といふものと、私釋といふものがあります。出文といふのは、始に佛の經説や、或は他の祖師方の釋文をお引きなされて、更に元祖の私でない事をお示しなされたのであります。而て其の出文に因んで、元祖御自身の思召のある所をお述べなされたのが私釋であります。今此の第一教相章は何をお明しなされたものかといへば、如來一代の教法に、淺深大小權實等の種々の法門あるが故に、三論宗にせよ、法相宗にせよ、或は華嚴にせよ、天台に

せよ、其の他眞言法華にせよ、其の宗に、皆教相判釋の仕方がある。今此の淨土宗の教相は、道綽禪師の安樂集によりて、聖道門と淨土門を以て、教相判釋とするぞとの御意であります。依つて此の教相章には、先始に道綽禪師の安樂集の御文を出されてあります。

此の道綽禪師といふ方は、もとは自力涅槃宗の方であつたが、御和讃にも涅槃の廣業さしおきてとある如く、四十卷もある涅槃經を二十餘遍もお講釋をなされた程でありますから、之を涅槃の廣業といふ。それを棄て、お仕舞なされ、御年四十八歳の時曇鸞大師の碑文を見て、大に感じたまひ直に聖道自力の珠數をきつて、易行他力の淨土門に入りたまひてより、觀無量壽經のお講釋をなされた事、又前後二百回に及ばせられたとある。今此の安樂集も亦觀經のお講釋でありまして、門を十二に分ちて、初の第一大門に觀經の題號に就いて、其の有難い奥義

をお示しなされ、終の第十二大門は、謗法罪を誡めて、信心をお勧めなされ、中の十大門は、觀經の本文に就いて、其の要義をお示しなされたのであります。其の第二大門より第五大門までは、末法五濁の衆生は、如何にしたらば淨土參りが出來やうかといふ淨土參りの因に就いてお示しなされ、第六大門より第十一大門までは、其の淨土の果に就いて、依報と正報をお示し下されたのであります。されど其の安樂集を煎じ詰めて見ると、聖道門をすて、淨土門に入れよとの御化導より外はありませぬ。今其の譯をいたいくに、此の聖道門をすて、淨土門に歸せよといふ、捨聖歸淨のお勸は、十二大門の中では、第三大門の御化導であります。先初の第一大門には、大集經の五個の五百年の説を引かせられてある。第一の五百年は、解脱堅固の時代と申して、智慧を磨き煩悩を斷じて、證を得る者のある時代なれば、従つて佛の正法も堅固に住

する。第二の五百年は禪定堅固の時代と申して、正法終りて像法の始  
 ならば、智慧を磨き煩惱を断する者はなくなり、唯禪定に入る者のみあ  
 りて、此で佛法が堅固に住する。第三の五百年は持戒堅固の時代と申  
 して、禪定を修する者はなくなつたが、僅に戒を持つ者があるので、夫で  
 法が堅固に住する。第四の五百年は造寺堅固の時代と申して、智慧を  
 磨く者も禪定を修する者も、又戒法を持つ者もなくなつて、唯寺や塔を  
 造る所の善根のみありて、兎に角に法がまだすたれずにある。第五の  
 五百年が闍諍堅固の時代であつて、互に法を諍ひながらに、法は猶未だ  
 廢しない。此の中道禪師の御出世の時代は、第四の五百年にして、正  
 法五百年も過去り、像法千年も過去り、末法萬年の始なれば、既に時も衰  
 へたり、機も劣りたり。此土入聖得果などは、夢にも見ることものなら  
 ぬ時代である。今は唯淨土の一門のみ通入すべき路ぢやぞと御示し

なされてある。此が第一大門であります。

次に第二大門には、菩提心といふ事に就いて、聖道の菩提心あり、淨土  
 の菩提心あり。淨土の菩提心といふは、願作佛心、度衆生心、是他力の菩  
 提心なりとお示しなされてあれば、第一大門も第二大門も、共に第三大  
 門の聖淨二門を引き起さんがための御化導である。

次に第三大門に至りては、正しく聖淨二門を明させられ、それより下  
 卷にうつりて、第四大門より、第十二大門までは、第三大門の聖淨二門を  
 開いて、御化導下されたのであれば、安樂集一部の肝要は、唯聖道を捨て  
 て淨土に歸せよといふより外はない。既に書物の名前からして、安樂  
 集とあるのも、此の意味であります。依つて今元祖聖人は、道綽禪師を  
 御相承あされ、安樂集一部の眞髓たる、聖淨二門を以て淨土宗の教相判  
 釋となされたる事でありませう。今此の御出文の安樂集の意味あひを

頂けば全體我等凡夫は一切衆生悉有佛性といふて如何なる者でも佛性のない者はない。其の上に久遠劫來澤山な佛にも値ひたてまつりたのに相違ないのに三恒河沙の諸佛の出世のみもとにありしとき大菩提心おこせども自力かなはで流轉せりと今日まで流轉したのは何故であらうかといふに答へて二種の勝法を得て生死を排せざるによるこの仰である。二種の勝法とは聖淨二門であります。其の聖道門では今日迎も證り難い其の證り難いといふに就いては二つの理由がある。一ツには大聖を去ること遙遠なるに由るが故に二ツには理深くして解微なるに由るが故にと仰られて次に大集月藏經の「我未法時中億々衆生起業修道未有一人得者」といふ文を引かせられてある。是未法の今日は聖道の修行の證り難きを示させられて其の次に「唯淨土一門可通入路」とあるは末世相應の要法は念佛の一法なりとお示し

下された者である。第一に大聖を去ること遙遠なるが故にとは大晋は釋迦如來であります。遙遠なるが故にとは道綽禪師は佛滅後千五百一十一年即ち末法の始に於て御出世なされた御方でありて佛出世の時代とは千五百年以上も遠ざかつて居る。五穀は能く稔る物なれども太陽の地を距ること若あまりに遠ざかつたならば其の光線幽微にして稔るべき力もなきが如く正法五百年の間は教行證の三法揃ふて具足すといへども像法の移れば教行の二法はあれども證の一法は闕けたり末法の時には行證の二ツ共闕けて唯教のみ残り故に「未有一人得者」といふ。第二理深くして解微なるが故にとは短い繩を以て深い井戸の汲まれぬ如く悟る所の智解は淺きが故に當今は現にこれ未法五濁惡世通入すべき路といふたら唯淨土の一門より外はないぞとお示し下されてある。然らば其の通入すべき淨土の一門とは何で

あるかと頂けば、夫をお知らせ下されたのが、次の大經の第十八願をば  
 觀經の下々品に移してのお示しであります。  
 ときに、第十八願ばかりで善かりそうなる者を、何故に觀經の下々品と  
 合してお示しなされたかといふに、夫に就いて、道綽禪師に三通りの深  
 い思召がある。一ツには第十八願の乃至十念の念佛は、觀念の念佛で  
 もなければ、意に念ふ意念の念佛でもない、即ち下々品の「令聲不絕、具足  
 十念、稱南無阿彌陀佛」の口稱の念佛であるぞとのお示しである。併し  
 こゝを間違へない様にせねばなりません、口稱の念佛といへば、とて、信  
 心なしの念佛ではない、信と行とは離れぬ者故に、信といへば必ず行が  
 付いて来る。行といへば必ず信がある事を、豫めきめておかねばなり  
 ませぬ。又一ツの思召は、道綽禪師の御時代は、彼の攝論家といふ者が  
 盛んな時代であるから、常に此の攝論家にあたらせらるゝ、思召がある。

彼の攝論家の人々は、觀經下々品の念佛を以て、別時意趣として、平生に  
 於て五逆を造り十惡を犯し、臨終に火の車の迎ひを受ける程の惡人が、  
 善知識より此の六字を勧められ、稱へたばかりで、即得往生とは、ソリヤ  
 餘りに話が甘過ぎる。去りながら、稱へた念佛が、遠生の結縁となりて、  
 何一度は往生するであらう。佛説の思召も、夫に違ひないなぞ、自力  
 に眼の眩まされて、眞の他力の佛意を知らず、逆惡攝取の念佛を説いた  
 有難い觀无量壽經は、アワヤ大地に陥ちんとする時なれば、道綽善導の  
 二大師、何として黙つて居らせられよう、善導大師はこれがために、彼の  
 有名なる六字釋を設けさせられました。六字釋は、次の二行章に、其の  
 御文が出て居りますから、其の時に話し致しませう。今道綽禪師  
 も、夫に當らせられて、下々品の念佛は、第十八願の念佛である。第十八  
 願の念佛には、若不生者の誓がある。何として、即得往生の利益が疑は

れようぞこのお示しであります。今一つの思召は第十八願のみでは逆惡攝取の相が見えぬ又十方衆生と誓はせられても衆生の中にも善人あり悪人あり智者もあれば愚者もある。今觀經の下々品と合したる所で愈彌陀本願のお目當が惡逆の愚人が正機といふ事が頂かれます。サア斯の如く道綽禪師の御意を頂いて見れば恰も未開野蠻の暗に眠つて居た日本人が嘉永三年に亞米利加水師提督のペルリに相州浦賀で呼覺された如く斯る明かな淨土の念佛がありながら聖道の暗に迷ふていつまでも自力修功の夢を結んで居たは如何にも殘念な次第であるこの御警覺であります。先一人に己の能力を量りて見よ諸法實相眞如一實の高尙な大乘の眞理が觀せらるゝかどうか未代下根の劣機には聖道大乘の法門は逆もあてはまるものではない。大乘どころか小乗の見惑思惑を斷じて阿羅漢の證を開く事も出来まい。

否小乗どころでない人天の善の五戒十善を持てば人間天上に生るとは聞けども夫さへ持てぬではないかしかのみならず日々の生活の有様はどうか若起惡造罪を論じたならば暴風駛雨の如くである茲を以て諸佛の大悲之を憐みたまひて六方恒沙の諸佛方が異口同音に淨土をお勧め下さる。大經から頂いても觀經阿彌陀經から聽聞しても三經全體が唯一念佛の呼聲である。早く分別せよ。逆も聖道自力で行けぬ機と氣が付いたら淨土念佛の一法に歸し三界流轉の縁を切れよやこのやるせない道綽禪師の御化導であります。私共の根機に合せて出来た本願なら間に合ふの合はぬのといふ論はない。頂かれない信せられない落付かないなど悶へて居る間は未だ自力の眞最中である。力もなけりやその道に覺もないものが常陸山や梅ヶ谷にとつてかゝらうとはソリヤ大膽である。相撲は大關同士にとらせて



置いて弱い此方は見物すべきである。我等が悪業煩惱は三世諸佛も取つて投げる程の大力なれば、彌陀法皇の大願業力にお任せしてやめなにとすればいよく悪念おこる悪念おこらばおこれと打捨て、念佛申すが手にて候悪業煩惱は、如來の大願業力に相撲とらして、弱い此方は見物して、たゞくあやまりはて、念佛すべきではありますまいか。

第一 教相章の上

四六

第一 教相章の下

皆さん、途中で人に出逢つた時、此方から挨拶しても、先方から更に一言の答もしてくれず、又人の家に行つても、石か何か、轉がつて来た位にも思つて、一寸も應對もしてくれず、善い事をして、譽められもせず、夫かといふて、悪い事をしたからとて、誰一人答めもせず。自己の一舉

一動に就いて、更に他人が何とも氣を付けてくれる者がなかつたならば、ナント其の人は淋しい事ではありますまいか。人は他人から話もしてくれず、善いとも悪いとも更に構はれず、只一人では暮らされる者ではありませぬ。學者が如何に熱心に講釋をしても、聞いてくれない、なく、美術家が如何に立派な繪畫や彫刻をしても、誰一人振向く者もなかつたら、其の人は勉強する甲斐も、骨折る所詮も有ますまい。人と人との間に、關係といふ者が付いてこそ、此の世に生きて居る所詮もあるといふ者である。今私共が未來の關係を考へて見たらば如何でしょう。夫こそ最早構つてくれる者は更にはないのである。「そもく、男子も、女人も罪のふか、らんどもがらは、佛法の悲願をたのみても、今の時分は、末代惡世なれば、諸佛のおん力にては、なかく、かなはざる時なり」と仰られて、右を向いても、左を顧みても、此の罪業深重の私共に對して

第一 教相章の上

四七

は誰一人聲を掛けてくれる者はないのであります。祖師聖人も廿九歳まで此の問題に悩ませられ、元祖聖人も四十三歳まで悶へさせられたか、遂に善導大師によりて、他力念佛の意義を御了得なされてよりは、燃るが如き内心の信念を、浄土宗といふ宗旨によりて、御發表あらせられ、始めて悪人往生の手引きをなし下されました。

ところが、前にも話しました通り、四方八方自力聖道の真中で、稱ふるばかりで助かるといふ様な、他力浄土宗をお開きなさるといふ事は全く毛色の變つた、意想外の宗旨である故に、他宗の諸師から非難を蒙る事は免れない、そこで今此の教相章では、始に安樂集の御文をお出しなされて、次の御私釋に至りては、他宗の諸師に對して、一言も反對のならば、一々出據をお擧げなされて、今此の浄土宗は決して法然一人が勝手にこしらへた宗旨ではないといふ事をお示しなされてあります。

法相宗にせよ、三論宗にせよ、華嚴宗でも天台宗でも、將真言宗でも、佛敎各宗の習として、其の開祖が宗旨を開くには、敎相判釋といふて釋尊の一代諸經に於ける分限を定め、敎義の優劣を判断するといふ事が、宗門を開く規則であるが、今汝が開く浄土宗には、此の規則があるか、どうかといふ事は、他宗の諸師から来る第一の質問の矢であります。それに答へさせられて、如何にも此の浄土宗に、敎相判釋がなくてなりませうか、と、そこで道綽禪師のお意に據らせられ、釋尊一代の説敎廣しと雖も、悉く聖道浄土の二門に攝らざるはなく、華嚴天台眞言等は、聖道門にして、弘願一乘は、是浄土門なりといふ、キツパリとした御判釋であります。併しこれでは、まだ聖道の諸師方が、なか／＼承知をしませぬ。そこで次には、諸師方をいやといはせぬ様に、御自身に問答を設けさせられたのである。

先第一に是迄華嚴天台等の八宗九宗の外に、別に一宗ありといふ事も聞かないが、何に依つて淨土宗といふ名を設けたかといふ難である。夫に答へさせられて、法相宗の慈恩大師や淨土宗の迦才といふ様な人も、自身の作つた書物に、外に一宗ある事を示してあり。殊に華嚴宗の元曉といふ人は、自身に作りた『遊心安樂道』といふ書物に、淨土宗の意は、本爲凡夫兼爲聖人なりと示してある。然れば、八宗九宗の外に、本より淨土宗といふ名前のある事なれば、決して法然が手細工では御座らぬといふ御答であります。然るにこゝに一寸氣を付けていたゞかねばならぬ事は、元祖は淨土宗といふ三字宗名をお名乗りなされ、吾祖は淨土真宗といふ四字宗名をお名乗りなさるは如何といふに、末燈鈔の上からいたゞいても、淨土宗のうち、眞あり假あり、眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善あり。選擇本願は淨土真宗なり、定散二善は

方便假門なりと仰られ、淨土宗といふは總じての名、淨土真宗といふは別しての名である。御和讃からいたゞいても、本師源空あらはれて、淨土真宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふと仰られ、元祖の開きたまふ淨土宗は、唯の淨土宗ではないぞ、既に選擇集の題號からして、選擇本願念佛集とあれば、淨土真宗の弘願他力の念佛である。若や自方の臭味を帯びた念佛ならば、汚氣のない、界外無漏の報土へは足踏みもならぬぞやとの御意見であります。然るに元祖の御意を過りて、後には雜行を許す淨土宗になつたは、殘念である。こゝを御文に、自餘の淨土宗は、もろゝの雜行をゆるす、わが聖人は雜行をえらびたまふ、この故に別して眞の字をいれたまふなりと仰られてある。つまり元祖の眞意を過らぬやうにと、御念を入れさせられたが、吾祖の四字宗名であります。さて前に戻りてお話しすれば、此の他力淨土宗は、道綽禪師の安樂集に

よりて、聖浄二門を以て教相判釋する。其の聖道門といふは、是に大乘小乗の二あり。大乘の中にも、漸教と頓教がある。華嚴天台眞言禪の如き四宗は頓教であります。今此の安樂集では、頓教大乘は指さぬ様なれども、たとひ華天禪密の四個大乘の頓教法も、我等が根機に叶はざれば、何の所詮もない。本より彌陀の本願は、本願のための下劣の機でなくて、下劣の機のための本願であれば、若や根機に叶はざる法なれば、假令尊き華天禪密の法も、彌陀の本願に對すれば、皆其の光を隠さねばならぬ。假令良藥ありと雖も、病に相應せざれば却て害をなす如く、法に權實なく、權實は機にありと申して、何の法にも優劣はなれども、劣れる凡夫の機のためには、華天禪密の法も、皆權假の方便となる。御傳鈔にも、世くだり人つたなくして、難行の小路にまよひやすきによりてと仰られ、御和讃には、聖道權假の方便に、衆生ひさしくとゞまりて、諸有

に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよとお勧め下さる。然も此の聖浄二門の御判釋は、道綽禪師御一人の御勸ではなく、曇鸞天台迦才慈恩等の諸師にも、皆此の御意がある。殊に曇鸞大師は論註に、天親菩薩の易行品に於ける難行道と易行道といふ、難易二道の判釋を御懇ろに知らせ下されてある御釋と、道綽禪師の聖浄二門とは佛に成るに就いて、因に約するの因果に約するのとの違ひのみであつて、其の意味合は全く同じ事でありませう。其の難行道の修し難いといふ譯に就いて、澤山の理由ある中先五三を示さんとして、五ツ通の難を擧げて、以て難行道を捨て、易行道に歸入せよと、お勧め下されてあります。第一は、如来の滅後に、外道の邪見が盛んになりて、大乘菩薩の行を亂すやうに成つた、此は外道といふ者が、肉體を以て迷の因となし、此の肉體と關係を絶たざる以上は、到底眞の解脱を得る事は出來ない者である、と心得て

第一 觀相章の下

實に堪え難き種々の方法を以て、苦行をする。其の有様を見て、菩薩の修行をする者も、圖す外道の邪行に陥りて、正當の修行の方法を誤る者がある。此が第一の難である。

第二は、此は世間に澤山ある類であります。人は慈善主義でなければならぬとか、他を愛せねばならぬとか、如何にも立派な事をいふて居れども、薄弱なる人情は、中々之に伴はない。弱肉強食の生存競争のほげしい世に暮す中に、何時しか前の主義を忘れて仕舞て、唯自己の利益のみを拵へる事にかゝり果て、全く自利の一方に傾く。菩薩の修行も此の如く、未だ志の堅固ならざる菩薩は、利他大悲の行を捨て、仕舞て、多く聲聞の自利根性に墮する。此が第二の難であります。

第三は、舍利弗が乞眼婆羅門に逢ふて、一念の瞋恚で六十劫の修行が退墮せし如く、無分別に悪人から障へられて、折角の菩薩の行も打破ら

る、事があつて、中々無難に菩薩の境界にまで達するといふ事は、困難であります。

第四は、世間の善は皆虚妄顛倒である。然も此の顛倒の世間の善果に愛着して、菩薩の行を退墮する。是世が未になればなる程、ますます人天五慾の境界に對する、愛着心が深くなつて來る相である。此が第四の難であります。

第五は、難行道とは、いふまでもなく自力の行なれば、佛の加被力もなく、他力の増上縁もないから、どうしても退墮し易い、此が第五の難であります。

斯の如く、ザット五ツ通程をお擧げなされて、今此の他力易行道は、如來の加被力あり。他力の増上縁あり。信するばかりで、佛力に住持せられ、魔事なく無上の佛果に到達する事が出来るぞよとのお示でありま

す。

第一 教相章の下

五六

最後に師資相承をお明しなされて、源空が唱ふる此の淨土宗は、決して源空の私ではなくて、菩提流支、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康と師資相承したのであると、一方には聖道の諸師に對して、其の私なき事をお示しなされ。一方には泣いても叫んでも仕方のない、必定墮獄の私共に、此の法然も此の通であつたが、今は師資相承の御教によりて、稱ふるばかりで、助りたぞやと、凡夫往生の先達とお成り下された。サア皆さんよ、印度にては、龍樹、天親の二菩薩や、唐土にては、曇鸞、道綽、善導や、此の日本にては、源信、源空の諸師を始として、三國の智者達も皆共に、末代の凡夫と手を引合ふて、愚痴にかへりて念佛したまひ、凡夫の智者顔は間に合はない、智慧も功德も了解次第。行も證も信じ次第。やがての内にお淨土で、一切智慧を満足し。なさぬ善根の主となり、つとめぬ功德を我物に

して、五十二段を背に見て、五十六億七千萬彌勒菩薩は、としをへん、まことの信心うる人は、このたびさとりをひらくべし、晝間道行きする時は、お伴は檀那のあとからゆく、夜中に道行きする時は、お伴が檀那の先にたつ、伴が先に立つ筈ではなけれども、そりや、提燈もつたお蔭。何も出ない、私が彌勒菩薩をはねこゑて、お先へ無上涅槃を證るとは、あらう事ではなけれども、そりや、五濁惡世の眞夜中に、南無阿彌陀佛の提燈持つたお蔭であります。

第二 二行章の上

是より第二の二行章に移りてお話し致します。前の教相章には、道綽、禪師の安樂集によりて、聖道門を捨て、淨土門に歸せよといふ事をお示しなされ、今此の二行章には、折角淨土門に歸しても、雜行は非本願

の行であるから、佛願相應の正行に歸せよといふ事を、善導大師の散善義の釋文によりて御懇ろにお示し下されたのが、此の二行章であります。

二行とは、正行と雜行とであります。初に正行といふは、觀無量壽經の文面に顯れて居る意味によりて、開いて五種をお示しなされてある。一には讀誦正行、是は即ち一心に専ら淨土の三部經を讀誦する事。二には觀察正行、是は一心に専ら淨土の依正二報の莊嚴を思ひやり、觀察する事。三には禮拜正行、是は彌陀を禮拜する事。四には稱名正行、是は六字の佛名を稱ふる事。五には讚嘆供養正行、是は一心に専ら阿彌陀佛を讚嘆し、御供養申す事で、此等は兼て御聽聞なされた事で、御座りましよう。次に此の五正行を正定業と助業との二種としてお示しなされてある。一に正定業とは、即ち善導大師の御釋文に一心に専ら彌陀

陀名號を念じ、行住坐臥時節の久近を問はず、念て捨てざれば、これを正定の業と名く、彼の佛願に順するが故に、とあります。さて此の一心專念等の三十四文字は、豫てお話致します様に、元祖法然聖人は、釋迦一代の經文をば、五遍もお読みあらせられ、其の上に善導大師の御書物をば、前後八回まで御覽あらせられ、遂に八回目に至りて、始て凡夫出離の一大事に御安堵なされたのは、偏に此の一心專念等の三十四文字であります。

先一心專念といふは、御開山は一念多念證文に、「一心は金剛の信心なり、專念といふは一向專修なり」と仰られ、愚禿鈔には「唯稱佛名專修」といふをお擧げなされてある。此の「唯稱佛名專修」といふが、即ち今の「一心專念彌陀名號」であつて、横超他力の弘願の念佛であります。此の念佛を稱ふるには、行も住も坐も臥も問はず、人によりて短命もあれば長命

もある事故、時間の長い短いを論じない。兎に角、稱へられる丈、稱へなさい。此の稱ふる念佛が、凡夫往生の正定業である。第十八願の約束が、此の通りであると、順彼佛願故」といふ五文字を以て、善導大師は明に證據立てをして下された。サア此の順彼佛願故の五文字、今迄暗に泣かせられた元祖聖人へ、大光明となつて輝いたのである。死せんとした法然聖人を活かしたまひたは、此の五文字である。如何に弘願の念佛が易行であり、易修であると、聞いても、彼の佛願に順するが故に、といふ證文がなかつたら、どうして落付きが出来ましょうか。四十三歳以後の法然聖人は、全く此の五文字によりて生代らせられたのであります。此のお喜びの有様を、和語燈錄に「順彼佛願故」の文、深く神に染み心に、とまりたりたるなり」と又聖覺法印の十六門記にて「觀喜のあまり、聞く人もなかりけれども、聲をあげて、予が如き下機の行法は、阿彌陀佛の法

藏因位の昔、かねて定めおかるゝをやと、高聲に唱へて、感悦髓に徹り、落涙千行なりきとあります。皆さんどうです、お喜びの餘りに一句くが踊りあがりていらせられる様な、誠に尊い御文章ではありませぬか。花は折りたくても、梢が高かければ、仕方がない。自力聖道の法は、誠に結構なれど、残念ながら背の卑い手の短い法然には届かない。然るに今は此の機根下劣の法然のために、阿彌陀如來が、法藏因位の其の昔に稱ふるばかりで助けるといふ、易行の一法をば、此の法然のために定めおいて下されたかと思へば、嬉しくて難有くて、感悦髓に徹りて、聞く人もなかつたけれど、聲をあげて泣き、千行の涙に袖をしぼりつゝ、大喜びしたと仰られてあります。是は元祖聖人のお喜びであると、元祖御一人に片付けてながめて居らるゝ譯ではない。元祖のお喜びは、即ち私共の大喜の種でありましょう。第一回の時、お話致しました通り、觀經正



宗分にながく説かせられて定散十六觀をば、惜氣もなく打捨てさせられ、流通分に至りては唯念佛の一法を阿難尊者に御附屬なされた。其の善導大師を承させられて上來定散兩門の益を説くといへども佛の本願に望むれば、意衆生の一向に彌陀佛名を專稱するにありと仰られた。アノ佛の本願に望むればといふ文が、今此の「順彼佛願故」の文であります。斯る明な御化導はありながら釋尊の捨てしめたまひし定散自力にいつまでも迷ふて折角五種の正行に歸しても、或は助正兼行とて、五種の正行をゴタ／＼に修して、夫で淨土へ參らんとする雜修に陥りたり、或は本願の嘉號を以て己が善根として稱へる稱名に力を入れて、夫で佛にならうなごいふ様な、自力根性では御佛の功を奪取らんとする盜賊といはねばありません。其では勿體ない次第である。本願の名號は、如來廻向の正定業であります。密相や柿や煎餅や菓子

を一時に小兒に與へんとしても、小兒の手がちさいから受取ることがならぬ。ソコデーツ袋をこしらへて、其の中に種々の物を入れて與ふれば、小さい手でも持ち易い。下根下劣の私共に、萬善萬行の大功徳を、一々與へて下されても受取れぬ故に、受易い様持易い様にとて、南無阿彌陀佛の袋の中に巻いてたゝんで、正定業として、發願回向と佛の方から與へて下さる。私の方では、唯夫を信受するばかりであります。佛に成る物種貫ふに嬉しさに稱ふる念佛は、既に報謝の稱名である。ところが一寸こゝに頂いて置き度は、元祖聖人は、住生之業、念佛爲本と仰られて、稱ふる念佛を正定業となさる。然るに吾祖聖人は、信心爲本と仰られて、往生の約束は信の一念に調ふたれば、其の上の念佛は、御恩報謝となさる。此の兩祖の相違は如何といふに、元祖が念佛を正定業と仰らるゝは、法體に約しての御意、元祖が佛恩報謝となさるゝは、機

に約しての御意であります。機に約していふ時は、元祖も吾祖も同じく佛恩報謝となされる。和語燈錄にも正しく佛恩を念じて、報盡を期として常に思ふべしとある。此が即ち前の三十四文字の中の念々不捨者の稱名であります。念々不捨者とあればとて稱へ通しに稱へねばならぬといふ譯ではない。さりながら廿五有界の永の迷ひも、今度が打止め根切りであると思ひ、海山もただならざる御恩ちやと思へば命のあらん限りは稱へられる丈は稱へなさい。一度彌陀を頼んだ行者なら、憶念の心つねにして、佛恩報謝するおもひありと彌陀を憶念する心がたえぬ故、自ら念々不捨者の稱名はとなへられる筈、此の念佛が佛恩報謝であるとの御意であります。又同じく和語燈錄に「天に仰ぎ地に俯しても悦ぶべし、今度彌陀の本願にあへることを、行住坐臥にも報すべし、彼の佛の恩徳を」と、此が前の行住坐臥不問時節久近の稱名を、佛

恩報謝の稱名となされたのであります。又元祖が日課として稱へたまひし七萬遍の念佛も佛恩を報ずるためであつたといふ事は、黒谷傳の平基親に下された御文でも明であります。又吾祖も法體に約しては、稱名を正定業と仰られてある。銘文に「正定の業因はこれ佛名を稱するなり」とありて、稱へごころは佛恩報謝でも、稱へらるゝ稱名は、一念の延行く正定業である。斯の如く頂けば、元祖も吾祖も異なることなく、唯當時の時勢に應じて、一は念佛爲本のお勧めなるが故に、報謝の義は蔭になりてあり。一は信心爲本のお勧めであるから、報謝の義が表に顯れてあるといふのみで、其の思召に至りては、同じ事でありませう。龍樹菩薩の易行品に「人能く是の佛の無量力功德を念すれば、即ちの時必定に入る、是の故に我常に念すと仰られてある。此の佛と指したは、阿彌陀佛であります。無量力功德を念すればといふ、此の念の字、龍樹菩薩

第二 二行章の上

薩の憶念の信であります。是の故に我常に念ずの念の字は、龍樹菩薩の佛恩報謝であります。八宗の祖師龍樹菩薩が既に佛恩報謝の義をお勧めなされてある。御當流に於て稱ふる念佛を御恩報謝となさるのほ、此が據であります。よつて御開山は、正信偈に、此の易行品を承けさせられ、憶念彌陀佛本願、自然即時入必定、唯能常稱如來、號應報大悲弘誓恩と仰られて、如來の御名を稱へて御恩を報せよとある。其の念佛を稱ふる時、如來廻向の行が、私共の身口意の三業に顯れては、或は讀誦正行にもなり、讚嘆供養正行ともなりて、自ら念佛を稱ふる助けともなる。此力から強て助けるではなけれども、他力の安心に催されて自ら念佛の助けになる。此が第二の助業であります。此の正助二行を除いて外は、御和讃に「淨土の行にあらぬをば、ひとへに雜行となづけたり」と仰られて、皆悉く雜行であります。次に此の正雜二行の得失に就いて、

五番の相對といふがあります。此は次に譲ります。

第三 二行章の中

さて正行を修する者と、雜行を修する者との就いて、元祖聖人は、善導大師の散善義の釋文の意味によらせられて、雜行と正行との得失に就いて、五番の相對を立てさせられて、雜行を御誠めなされてあります。其の五番の相對とは、

第一は親疎對。是は正助二行を修する者は阿彌陀如來と關係が甚だ親しく、此と反對に雜行を修する者は彌陀と行者との關係が甚だ疎なる事をお知らせ下されたのであります。こゝに正助二行とあるけれども、正業も助業も共に如來より御廻向の六字である。此の如來御廻向の六字の信心より催されて、身口意の三業に顯れては、佛恩報謝

の助業となる故に、其の體を尋ねれば、一念佛より外はない。即ち善導大師の仰られたる順彼佛願故の念佛であります。此の念佛を修するのが阿彌陀如來と親しきわけを、定善義に、三縁釋ある中の親縁の釋をお引きなされて、お示し下されてある。即ち衆生常に佛名を稱ふれば佛は常に之を聞いて御座る。身に常に佛を敬禮すれば、佛は常に之を見て御座る。意に常に佛を念すれば、佛は常に之を知つて御座る。衆生佛を憶念すれば、佛また衆生を憶念したまうこと親の子を思ひ、子の親を思ふが如くである。子供が意地悪い犬に逐はれて、畏しさのあまりに汚れた泥足のそのまゝで親の膝元へ馳行けば、ヤレ汚い、その汚れた手や足のまゝでは寄付けぬぞ、手足を洗ふて來てすがれといふ親はありますまい。惡業煩惱の虎狼に逐ひまくられた私共が、助けたまへと、一念彌陀を信じた端的に、受取りたまふ親様は、嫌がるどころではな

い、深く喜びましく、て、無願無行の裸體罪業深重の泥足のまゝを、光明の懷へ攝取りて下さる。こゝを觀經には、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と、お説き下されてある。既に光明に攝取せられた身の上なら、憶念の心つねにして、佛恩報するおもひがなければならぬ。衆生は絶えず彌陀を憶念し、彌陀は常恒に衆生を憶念して下さる。此の憶念は、即ち攝取不捨であります。そこで彌陀と衆生の間柄は、彼此三業不相捨離と、離すに離されぬ御縁が結ばれてある。是が即ち親縁であります。然るに雜行を修する者は、之と反對に餘佛の名を稱へ、餘佛を禮拜し、餘佛を念じて、夫を阿彌陀如來に廻向して、淨土へ参りたいと願ふが、故に衆生と彌陀との三業が一體にならう道理がない。不相捨離でなくて相捨離して居るのである。故に彌陀との間柄が親しくない。親しくないから雜行を又疎行とも仰られる。是が第一の親疎對であ

第二 二行章の中

ります。

第二に近遠對。此は念佛行者には如來が近きたまひ、雜行の人には近きたまはぬとの御知らせであります。近遠對の近きは近隣の義で、阿彌陀如來は常に念佛の行者に近きたまひ、念佛の行者を影護して、暫くも離れ給はぬ處の近縁の利益をお示し下された者である。前の親縁と此の近縁とは攝取不捨の利益でありまして、親縁の方は彌陀と衆生と心の親しき事をお示しなされ、近縁の方は場所に就いて、彌陀は私共の身體に付添ひたまひ、暫くも離れ給はぬ事をお示し下された者であります。元祖の漢語燈錄から頂けば、此の近縁に付いて、平生と臨終とに約してあります。念佛の行者は臨終どころか、平生において、若人佛を念すれば、阿彌陀佛無數の化佛化觀世音化大勢至常に來りて、此の行人の所に至りたまふ。念佛の艸庵隘しと雖も、恒沙の聖衆雲の如く

第二 二行章の中

集り給ひ、念佛の行者を取圍んで下さるとある。之と反對に、若人念佛せざれば、恒沙の聖衆一箇も接せず、無數の化佛一佛も來らずとある。そこで念と不念と得失天淵なり、行者應に知るべしと、熱血を注がせられての元祖の御注意であります。是が第二の近遠對である。

第三には、無間有間對。此は他力念佛の行者は、彌陀を憶念する心がたえぬ故に、無間斷である。若雜行の人ならば、假令頭髮に火の付いたるを拂落すが如く、急しく勤めても、如來より貰ふた金剛の信心でない故に、昨日は藥師如來、今日は大日如來といふが如く、阿彌陀佛に對しては、常に間斷がありがちである。是が第三の無間有間對であります。

第四には、不廻向廻向對。此は最も肝要でありまして、御當流の不廻向といふ事は、此から出たのであります。雜行は其の體人天三乘の行であつて、彌陀に向へば、非本願の行であるから、本より往生の行ではな

い。依つて若難行で往生したいと思ふならば、夫を取直して彌陀の淨土へ廻向せねば、往生の行とはなりませぬ。そこで難行を廻向の行と名けます。然るに念佛は、御和讃の上にも「眞實信心の稱名は彌陀廻向の法なれば、不廻向となづけてぞ、自力の稱念さらはる」と仰られて正行はもとより彌陀廻向の法であるから、別に行者の方から廻向せずとも、自然に往生の出来る御約束になつて居る。そこで行者の方からは念佛を不廻向の法と申します。これが廻向不廻向であります。さりながら一生造惡の私共が、念佛一つで往生が成るといふ事は、他力の御親の御實意の知られない間は、容易に合點は行きがたい。第四回の時にお話しました如く、攝論家が念佛別時意といふ事を募つたのも、一往は尤もである。併し此は未だ自力に眼を眩されて居るからである。依つて善導大師は、此の攝論家に合點をさせやうとの思召で、六字の藏

を押開き、中の寶をさらけ出してお見せなされたのが彼の六字釋であります。今元祖聖人は、他力の念佛は不廻向の法であるから、別に行者自力の廻向を要しないといふ證據のために、其の善導大師の六字釋をここに引きなされてあります。此の六字釋は、玄義分に七門分別ある中、第六の和會門に於て、攝論家の別時意を通釋したまふ御文であります。攝論家の別時意といふは、今世に稱へた念佛が遠生の宿縁となりて、即ち別の時に或は佛に成る御縁となる事もあらうが、併し觀經下々品の惡機が、今稱へて今即得往生の利益を得るといふ事は、そりや以ての外な事である、何となれば、往生遂げたいといふ願ばかりありでも、往生する程の行がなければ仕方がない。唯願無行で佛になられそうに説いてあるのは、即ち別時意の方便であるといふのである、之を聞きたまひし大心海化現の善導大師

直ちに大鐵腕をふるひたまひ、如何に自力に眼が眩めばとて、此の六字の名號を唯願無行とは何たる謬りぞや、下々品の十聲の念佛には、一聲に願もあれば行もこもつてある故に、十聲稱佛には、十願十行具足してある。其の具足した有様は、コレ此の通りぞとお示しなされたのが、世に名高い、六字釋であります。其のお釋を頂いて見れば、本より我等凡夫は無願無行の丸裸で、往生の出來やう道理はなけれども、此の六字のお由を頂いて見れば、南无と言ふは、即ち是歸命、亦是發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふは、即ち是其の行なり。斯の義を以ての故に、必ず往生することを得と仰られて、足も濡さず手も濡さず、願も行も貰い物で其の儘往生の出來るといふ事は、全く名號六字の一手働きであります。まづ「言南无者即是歸命」とあるのを銘文の中には、歸命は釋迦彌陀二尊の勅命に従ひ、召にかなふと申す言葉なりとあり。又行卷には

「歸命とは、本願招喚の勅命なり」と仰られる。同じ一つの歸命が、或時は如來の勅命の様に、見え、或時は行者の信心の様に、見えるのは、如何といふに、一人の女を、或時は母といひ、或時は娘といふ。體は一人の女なれども、親に向へば娘といはれ、子に向へば母といはれる。向ふ處によりて名が變るばかりで、體は一人の娘である。今此の歸命もその如く、五劫の御思案から、永劫の御修行でお骨折り下された、親様の方からいへば、歸命とは本願招喚の勅命なり、善知識の御教化で貰受けた我等の方からいへば、釋迦彌陀二尊の勅命に隨ふ信心である。其の體は、一の南无阿彌陀佛の外にはありません。又蓮如上人は、歸命といふは衆生の阿彌陀佛後生助けたまへと、たのみたてまつる心なりと仰られるのは、御開山の方では、歸命といふ字義に就いて、釋迦彌陀二尊の勅命に信順する事ぢやと仰られる。今蓮如上人は、元來南无といふは、梵語と

申して天竺の言である此の梵語に度我の義救我の義といふがある故に之を歸命にうつして衆生の後生助けたまへと頼むことちやと教へて下さる。然れば御開山の仰られる勅命に順ふといふ其の順ひ心が、蓮如上人の御教化によりて後生助けたまへと頼む事ちやと一層明に頂く事が出来まする。

次に此の歸命に發願廻向の義がある。これを佛のお手許からいふ時は即ち信心獲得のお文に「南无と歸命する一念のところに發願廻向のころあり、これを大經には令諸衆生功德成就と説けり」と仰られたは、この意であります。又行者の手許からいふ時は、廻向とは廻志向道の義で、自力を廻して、他力の大道に向ふ事なれば、歸命する一念の當體に萬行具足の名號が其の儘凡夫往生の正定業となるのであります。併

し蓮如上人の御文からいただきますと此の發願廻向が多く法の方の發願廻向になりてあります。そして其の發願廻向が功德廻施の發願廻向と攝取不捨の發願廻向との二様のお示しがありますが、功德廻施の發願廻向の方では、即是其行を發願廻向へ收めての御化導であります。して、發願廻向は如來の大悲心である。其の大悲心から廻向して下さる品物は、何かと問へば、是が即是其行であります。又攝取不捨の發願廻向の方では、廻向して下さる、如來の大悲心に約する發願廻向をば、廻向の行體たる、即是其行に攝めて示してあります。四帖目第十四通の御文に「又發願廻向といふは、たのむところの衆生を攝取して、すくひたまふ心なり、これすなはち、やがて阿彌陀佛の四字のころなり」とお示し下されたは、此處のお意であります。委しく申せば、限りもない事でありますが、兎に角、南无は願なり、阿彌陀佛は行なり。どうしてこれ



第二 二行章の中

が攝論家の如く、唯願無行といはれようかどある。善導大師の古今楷定の妙判によりて、愈々私共の往生は大丈夫になりました。然し雜行の人には、此の御廻向の利益はないのであります。此が廻向不廻向對である。

第五には純雜對。是は純はまじりものない念佛の正業であります。雜行の方では、五戒十善の如き人天の因もあり、四諦十二因縁、六度の如き聲聞緣覺菩薩の因もありて、人天三乘の解行まじはるが故に、往生極樂の正業ではない。斯の如く、一々得失を擧げさせられて、其の結文に「然れば、西方の行者須く雜行をすて、正業を修すべし」と、五番の相對を立てさせられて御懇ろに御化導下されました。

第二 二行章の下

今一回、二行章のお話を致さねばなりません。時に、此の二行章は、外の章とは異りて、出文が二ツあります。一は散善義であつて、二は往生禮讚であります。先づ散善義の方は、善導大師御自身に雜行を捨て、正行に歸したまひ、五番の相對を立て、二行の得失をお示しなされてある。元祖の御私釋に至つては、最も明かに其を御講釋なされて私共に捨雜歸正をお勧め下されてある。是は前回にお話した通りであります。然るに散善義に於て、五番の相對を立て、二行の得失を擧げたまひてはあれど、其の文甚だ略であつて、未だ充分に得失の相を示したものと見えなない。そこで重ねて元祖聖人は二行の得失を最も悉しく明させられてある、往生禮讚の文をお引きなされて、御懇ろに專修正行をお勧め下された者が、後の禮讚の御釋であります。然らば其の往生禮讚の得失の文とは如何といふに、是は外でもない、專修の四得と、雜

修の四失であります。其の雑修の四失を開いてお示しなされたが雑修十三の失であります。先專修の四得とは信の上から専ら念佛を修する者は、十即十生、百即百生、一人として極樂へ生れそこないの、ないといふに就いて、四故といふて、四ツのわけがらをお示しなされてある。是が四得で其の四故とは、何々であるかといへば、左の四である。

一には、外の雑縁なくして正念を得るが故に。正念とは、信心の事でありませぬ。此の信心の正念を雑縁とませかへす所の縁となる者を外の雑縁といふ、言を換へていへば誘惑であります。凡人は自分は何物であるか、又何をなさんとする者であるかといふ自信といふ者がなく、ては、何事も成功する者ではない。自信のない者は、必ず敗れます。都へさへ上つたら、必ずえらい者に成れるだらう位の考でやつて来ても、身の周圍には常に怖しき誘惑物が附纏ふて居るから、餘程自信が強く

なくては、覺えず知らず、救ふ可らざる墮落に陥ります。今信心の行者は自己の價値のなき事を信じて一切を如來にお任せして居るから如何なる誘惑物も此の人を亂す事はならぬ。是を外の雑縁なく、正念を得ると仰られたのであります。

二には、佛の本願と相應するが故に。角な函に角な蓋圓い器に圓い蓋をした如く專修念佛の行者は彌陀の本願の其のまゝ、を信じ、彌陀の呼聲の其の儘を受けて眞一文字に進むのであるから能く彌陀の本願と相應して居ります。

三には、教に違せざるが故に。教とは釋尊の教勅であります。釋尊の教勅は彌陀の本願の其の儘であります故に、彌陀の本願を信ずるの者が即ち釋尊の教勅に隨順することでありませぬ。

四には、佛語に隨順するが故に。釋尊の教勅は諸佛の思召なれば、彌

陀の本願と相應する專修の行者は釋尊の教勅に叶ふばかりでなく、此が真に諸佛のお語に隨順する譯であります。

以上の四得を御開山は利他の信樂うるひとは願に相應するゆゑに、教と佛語にしたがへば、外の雜縁さらになしと最も簡單明瞭に一首の和讃についでお示し下されました。利他の信樂とは信心の正念である。此の信心は彌陀の本願と相應する。本願と相應するが故に釋尊の教勅に叶ふ。釋尊の教勅に叶へば諸佛のお語に隨ひ申す事になる。斯くの如く彌陀釋迦諸佛の三佛に隨順する身の上は、寝ても起きても朝な夕な、佛は此の行者を離れ給はぬ。であるから信心の正念を亂さんとする雜縁の誘惑が如何程來つても、これがために動される様な事はない。是が專修の四得である。四得ではあるけれども後の三得は初の第一得に攝りて、外の雜縁なくして正念を得るが故に、十即十

生百即百生決して間違ひはないぞといふに就いて、四故をお挙げ下さいました。

次に雜修の行者は百人中に一二人、千人中に五三人と始めに與へておいて、後に之を奪ふて、千中無一と千人中一人も往生はならぬぞと、お誡めなされてあります。其の往生のならぬ譯に就いて十三の失をお挙げなされてある。

- 一には、雜縁亂動して正念を失するが故に。
- 二には、佛の本願と相應せざるが故に。
- 三には、教と相違するが故に。
- 四には、佛語に順せざるが故に。
- 五には、係念相續せざるが故に。
- 六には、憶想間斷の故に。

第二二行章の下

七には、廻願懇重眞實ならざるが故に。  
 八には、貪瞋諸見の煩惱來りて間斷するが故に。  
 九には、懺愧懺悔の心あることあきが故に。  
 十には、相續して彼の佛恩を念報せざるが故に。  
 十一には、心輕慢を生じ、業行を作すといへども常に名利と相應するが故に。

十二には、人我自ら覆ふて、同行善知識に親近せざるが故に。  
 十三には、楽しんで雜縁に近づきて、往生の正行を自障障他する故に。  
 此の中初の四失は、前の專修行者の四得と全く反對であります。御和讃に「本願相應せざるゆへ雜縁きたりみだるなり、信心亂失するをこそ正念うすとはのべたまへ」と仰られて、是亦後の三失を初の一失に攝めて雜修の行者は、彌陀の本願と相應せず釋尊の教勅にも違し諸佛のお

語にも隨順せぬ故常に貪瞋諸見や異學異見の外の雜縁に隙をねらはれて、信心を亂さるゝぞやとの仰であります。第五の係念相續せざるが故にとは係念とはおもひをかける事。今雜修の行者は或は彌陀に或は藥師に或は不動にといふ様に、更に思のかけ所が定らぬから專ら彌陀を念ずる心が相續しよう筈がない。そこで此から第六の憶想間斷といふ失が出て來る。雜修の行者は對する所の佛が定らぬから彌陀を憶念し彌陀を想ひやる意が相續せずして、切れくになつて居ります。そこで第七の失の如く廻願懇重眞實でない。廻願とは安樂淨土に生れんと願ふ發願廻向である。第五の失の如く思のかけどころが定らぬから第六の失の如く彌陀の憶想する意が、間斷ときれくになる。そこで今此の第七の失の如く、發願廻向が懇ろでなく丁重でなく眞實でない。此の五六七の三失が、曇鸞大師の三不相應に當ります。

第二二行章の下

第二二行章の下

此の三不相應のお釋を御開山は御和讃にお知らせ下されてあります  
 「二者信心あつからず若存若亡するゆへに」といふが第七の失にあたる  
 若存若亡とは、信心が見えたり見えなくなつたりするのは、信心が薄く  
 ないので、薄くないのは、機の扱ひが雑るからである。そこでどうして  
 も、廻願懇重眞實とはなりかねる。「二者信心一ならず、決定なきゆへな  
 れば」といふが、第五の係念相續せざるが故に、といふ失に當り、「三者信心  
 相續せず、餘念間故とのべたまふ」といふが、第六の憶想間斷する故にと  
 いふに當ります。切れた糸口を結ぶには、始の切れた處から結べば相  
 結するけれども、他の糸口を取出して、つながらうとするから亂れずには  
 居らない。今彌陀を念ずるといふのも、無明煩惱のしげき私であるか  
 ら、朝から晩迄思ひつゞけるといふ事は出来ねども、昨日思出した時も  
 私をお救ひ下さる親様は彌陀一佛今日思出した時も我が親様は彌陀

第二二行章の下

如來なりと、昨日も今日も思出す度に、同じ切れ目の糸口を引出すから  
 此の信臨終まで魔事なく相續するのであります。雑修の行者には是  
 がありませぬ。此の論註の三不相應は皆不如實修行であります、「如  
 實修行相應は信心ひとつにさだめたり」とあれば、以上の五六七の三失  
 は皆不の字が付いて他力の信の得られぬ相であります。然れば此の  
 三失は、つまり第一失の信心の正念を得ざるの失に攝つて仕舞ます。  
 又第八失の貪瞋諸見の煩惱から障へられて、信心の正念を失ふのも或  
 は他力に絶る心がなくして、自力の功を募り、我身の價値を知らずして  
 慚愧懺悔の相のないといふ第九失も共に第一失の雜縁亂動する相を  
 開いてお知らせなされた者であります。さて十三失の中、初の九失は  
 十九の願要門の機の失にして、是より以下、四失は、二十の願眞門の機の  
 失であります。依つて初の九失は、雜行を修する雜修の機の失であり、

是より以下は、専修雑心の機の失と申して、専ら彌陀佛名を稱へながら、未だ定散雑心であるから、我を助けたまふは彌陀一佛なりといふ一心が得られない。「一心を得ざる人なれば、佛恩報するこゝろなし」とこそ、こで相續して佛恩を報せずといふ第十の失が起つて来る。次に第十一失も此の第十失から起つて来たものであります。驕慢は自分を高ぶり、人を輕蔑する事である。業行をなすとは、正定業の念佛を稱へ、前三後一の助業を修する事でありませう。(前三とは、讀誦觀察禮拜で、後一とは讚嘆供養の事であります) 自力を頼んで居るから、佛恩を念じない。そこで折角念佛を稱へても、前三後一の助業を修しても、修した功を先に立て、我を誇り驕慢を生ずるやうになる。こうなつて来るに、自然第十二失も起つて来て、人我自ら覆ふといふて、おれがとか、おれなればこそといふ様な、我慢や高慢を起して、自分と同行善知識に親しまない

様になる。「佛法とは無我にて候、我といふことは、いさゝかもあるまじき事なり……人にまけて信をさるべし」といふお誠は忘れてならぬ事と思ひます。此の第十二失の同行善知識に親近せざる失から、第十三失が起つて来て、好んで雜縁に近き、自身ばかりでなく、他人の往生の正行までを邪魔する事になる。さて此の十一、十二、十三の三失は、皆第十失の相續して佛恩を念報せざるより来たものであります。然れば後の三失は、第十失に攝ります。そして之を本へ戻して見れば、「一心を得ざる人なれば、佛恩報するこゝろなし」と佛恩報する思ひのないのは、源を尋ねれば、一心の信心を得てないからである。此の如く頂いて見ると、此の雜修十三の失は、悉く始の第一失の信心の正念を失ふの一失に攝ります。

皆さん、なせ信心が得られないのでありませうか、雜修十三の失は

第三 本願章の上

悉く機のはからひであります。機のはからひの除かぬのは、彌陀の御慈悲や、御力に底入れをして居るからであります。マア考へて御覽なさい。此の世の中を暮すにも、情や力といふ様なものがなかつたら、人は到底一日も一人立は出来ずまい。私は信じます、阿彌陀如來は世の一切の情の根本である。世の一切の力の活源である。此の如來の慈悲(即ちなまき)と願力(即ちちから)は、過去といはず、未來といはず、將現在といはず、三世を通じ、十方に普遍して御座る。此の如來の大慈悲、如來の大願業力を無にして、微弱な我が自力の修功を頼み、機のはからひをなすなどは、實に大膽千萬な事で、恐入つた次第であります。

第三 本願章の上

今回から第三の本願章のお話を致します。前の二行章の御私釋に

第三 本願章の上

問ふて曰何故に五種の中獨り稱名念佛を以て正定業とするや答へて曰彼の佛願に順するが故にと仰られて稱名念佛は、阿彌陀如來の本願の行であります。故に此の本願念佛を修する者は、彌陀の本願に乗じて必ず往生を得るとある。然るに此の本願の義は、下に至りて知るべしと仰られて、本願のおいはれの難有き思召は、此の本願章にお譲りなされてある。是が此の本願章の起りて来る所以であります。誠に此の本願章は、選擇集中の眞髓であります。今までの章では、立教開宗は出来たといふもの、其の立教開宗の上に、正しく淨土眞宗の宗義といふ者は、此の本願章に來りて、始めて全く出来上たといはねばなりません。第二回の時に於てお話ししました如く、元祖聖人が、此の選擇集に、三經によりて七選擇を立てさせられてある中、餘の六選擇の技業は、皆此の第一の本願選擇の根幹から出て來るので、其の第一の本願選擇の相を、大

經に據りて、委く明させられたのが、此の本願章であります。皆さんや私共が、兼々本願のおいはれをいたたく事ですが、其の本願のおいはれの御化導の流出る源は、此の選擇集の本願章であれば、お互に最も大切に最も喜んでいたゞき事であります。

先切に、阿彌陀如來は、凡夫往生の行として、餘の萬善萬行ではない、唯念佛ばかりが往生の行とする本願である。直ちに大經の第十八願をお引きなされてある。元祖聖人の御眼には、願に眞假の區別を見給はぬから、十九も二十も其の他の諸願も、皆眞實の願にして、餘の四十七願は第十八願に對する欣慕の願として、四十七願を全くしたるのが、第十八の王本願ぢやと御覽なされる。此は勿論善導大師にお據りなされたのである。善導大師が立義分に「四十八願、一々願言、若我得佛、十方衆生等」と仰られて、四十八願一々の願にのたまはくと標しながら、唯第十

八願の取意の御文ばかりをお舉げなされてある。是四十八願廣しと雖も、正報の佛身成就も、依報の佛土成就も、無三惡趣の願も、不更惡趣の願も、終りの得三法忍の願も、盡く如來の作願をたづぬれば、苦惱の有生をすてすして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せりといふ御和讃の如く、唯衆生のための御慈悲をば、第十八願の呼聲を以てお與へ下さる。然れば衆生往生の因も果も、唯此の第十八願一ツで成就するといふ思召であります。吾祖聖人が願に眞假をわかち給ひ、衆生往生の因果をば、十七、十八、十一、廿二の四願に分ち給ふは、もと淨土論論經にお據りなされたもので、論註の一心、五念、五功德門の因果をば、以上の四願に御配當なされたのであつて、論註から直に大經を見給ひし上の、分相門といふ御覽なされ方であり、善導大師や元祖聖人は、觀經から大經をおながめなされた上での該攝門といふもので、これはお話をすると中



々六ヶ敷い事で、長くもなりますし、又學問沙汰になりますから、略しておきますが、兎に角十七願の行體も、十一願の必至滅度の證果も、廿二願の還相廻向の御利益も、本へ戻せば、皆第十八願の信じて稱へる上の功德であるからお意に違ひのあらう筈はない。今善導大師に依らせらるゝ元祖聖人であるから、此の選擇集十六章段も、唯第十八願の一願を以て、前後十五章を貫かせられての御化導であります。其の第十八念佛往生の願の文と申すは、設我佛を得たらんに、至心信樂して我が國に生れんと欲ふて、乃至十念せん、若生れずば正覺をたらじ、唯五逆と正法を誹謗せんをばのぞくと、次に此の十八願に對する善導大師の觀念法門と往生禮讚との取意の御文を擧させられて、此の難有い願文の意をお示し下されてありますから、今其の善導大師の御文によりて味はさして頂きましよう。先觀念法門の取意の御文とは、若我成佛せんに、十

方の衆生、我が國に生れんと願じて、我が名字を稱ふること、下十聲に生るまで、我が願力に乗じて若生れずば正覺を取らじとあります。此若我成佛は願文の「設我佛」と同じ意味で、若は不定の言である。久遠古成と申して、久遠劫の昔に成佛して御座る如來が、果後の方便に法藏菩薩と現れたまひし、其の菩薩の成佛が不定であらう筈はなけれども、因地から極果を願ふは難事故、暫く不定の言をおかせられたものであります。「十方衆生」とは成就の文には「諸有衆生」とある。吾祖はこれを廿五有に流轉する衆生と仰らるゝ。然れば十方衆生の中には善衆生も悪衆生もあり、智者もあり愚者もあるけれども、智者よりは愚者、善人よりは悪人がお目當で、善人なほもて往生す、いかに況や悪人をやで、本爲凡夫兼爲聖人の思召が明に頂かれます。「願生我國」とは願文の「欲生我國」であります。然るに次の「至心信樂欲生」の三信は、大概いつも中に信

樂に合するのには、至心信樂を略して「欲生」に合してあるのは如何にと申すに、全體此の文は、善導大師が觀念法門に、五種の増上縁といふを明したまふた中の、攝生増上縁の御文であります。疑ふには及ばぬ機遣ふには及ばぬ如何に凡夫が無力量でも無能でも、佛の大願業力が増上縁となつて下さる故、往生を上げたいと欲ふ者なれば、一人も洩らざす攝受するぞとあるが、攝生増上縁であります。是疑深き私共が、假令往生を願ふたとて、凡夫が界外無漏の淨土へ往生とは……と危むゆるに、夫へ對させらるゝ思召である。成就の文の「願生彼國」の願の字をこゝへもち來りて、「欲生」の欲の字を願の字に改め、次に願文の「乃至十念」を、觀經下々品の「具足十念稱南無阿彌陀佛」の文に移して、稱我名字、下至十聲「このたまふ。然れば願生我國の願あり稱我名字、下至十聲の行あり攝論家のいふが如き唯願無行ではない、願も行も具足した行者争かり

往生に、間違ひがあらふぞとの御意であります。次に「乘我願力」がある、是は願文にはない事であれども、善導大師が此の四文字を加へさせられたので、一層難有いのであります。御開山は銘文に「乘我願力」とは、乘はのるべしといふ、又智なり智といふは、願力にのせたまふと知るなり、願力にのせて、安樂淨刹にうまれしむるとなりと仰られて、本願力を信知する事が乘我願力であるから、心に信じ口に稱へて、願行具足を待たなければ、往生が定らぬといふ様な、手ぬるひ事ではない。往生の生因は唯本願力に乗ずる信の一念に定るといふ事をお知らせ下された御文であります。次に往生禮讚の文とは、若我成佛せんに、十方の衆生、我が名號を稱せん、下十聲に至るまで、若生れずは、正覺を取らじ彼の佛、今現にましゝて成佛したまへり、當に知るべし、本誓の重願、虚しからず、衆生稱念すれば、必ず往生を得、此は元祖聖人が、吾祖聖人へ選擇集御附

屬の時に、御眞影の銘に書き與へたまひた、善導大師加減の文といふて、この文をつねに口にもとなへ心にもうかべ、眼にもあてよと仰られて、殊に肝要としたまふ、大切な四十八字の御文であります。こゝには、稱我名號下至十聲とのみあつて、願文の三信を出さず、信を行に攝めての御化導は、元祖が平生の行中攝信のお勸振であります。此の四十八字の中前半廿四字は、因願の文を示させられ、後半廿四字は、彌陀の本願成就の相をお示しなされて、彼佛今現在成佛とは、若我成佛の成就の相、衆生稱念必得往生とは、若不生者、不取正覺の成就の相であります。危みとうても危まれません、落ちとうても落ちられぬ様に、當知本誓重願不虛と廣大深重の誓願の虚しからざる事をお示し、下された誠に難有いお釋であります。

吾祖御開山の教行信證の四法建立も、此の元祖からたまはらせられ

たる善導の加減の御文意より外はない。稱我名號下至十聲は行である。當知本誓重願不虛は信である。衆生稱念必得往生は證果である。之を教へていたゞいたは教である。こゝを最もよくいひ顯したまひたのは、歎異抄の親鸞にきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰をかうふりて信する外に、別の子細なきなりとの御意であります。こゝをよく考へて御開山の御領解を味ふて下さい。たゞ念佛しては、教行信證の中では行であります。彌陀にたすけられまゐらすとは、證であります。よき人の仰とは、教であります。信する外に別の子細なきなりとは、申すまでもない信であります。う。こゝに多勢の兄弟ある人が、親の恩を思ふ時、我一人の爲の父ではない。我一人を座んでくれた母ではない。我々兄弟十何人共同の父母である、こんな考へでは、眞實に親の有難さは知れませぬ。唯私一

第三 本願章の上

人の親であると思ふてこそなみ／＼ならぬ親の恩が知れます。元照律師は「我が彌陀は名を以て物を攝すと、外の人の親とは宣はぬ。我が彌陀との御喜びである。祖師聖人も、九歳から廿九歳まで、永き月日の間は天台の門に於て親なしに、理智の判断に身心を苦しめ給ひしが、今元祖聖人の御教によりて、永却離れぬ御親を得たまひ、彌陀の五却思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親戀一人がためなりけりと喜びたまひ。今又此の御言にも、他の人は兎も角親戀におきてはこの御領解であります。そして其の述べさせられたお領解が、其のまゝ浄土真宗の礎たる、教行信證の四法である。どうか私共も、此の祖師聖人の御領解に基いて、一人／＼に私のための親様の御苦勞であつたと、彌陀の御恩を仰がねばならぬ事と思ひます。

第三 本願章の中

さて第二の二行章にお勧め下されたる稱名は、全く阿彌陀如來の選擇本願の念佛であるといふ事をお示し下されたのが、此の本願章であります。夫に就いて、前回では元祖聖人が、先第一に大經の第十八願の文を御擧げなされ、次に善導大師の觀念法門と往生禮讚の文とを以て、此の十八願文の御意をお示し下された事をお話致しました。今回は元祖聖人の御私釋即ち元祖の御意から頂きますれば、此の元祖の御意が二段に分れて、初が選擇の願意を明し、次が念聲是一といふ事を明させられてある。今は先選擇の願意に就いて、お話致しましょう。

總じて一切の御佛に願のあらせられぬ佛は御座りませぬ。其の願に總願と別願とがあります。總願とは、四弘誓願といふて、如何に澤山

な衆生でも、洩さず濟度したいといふ誓願と、如何に澤山な煩惱でも、斷じ盡さねばおかぬといふ誓願と、如何に多くの法門でも知り盡さずはおくまいといふ誓願と、必ず無上の佛果菩提をば、證らすにはおくまいといふ誓願此の四つの誓願は、總じて一切の諸佛には、必ずあらせられる故に之を總願と申します。次に別願といふは、諸佛菩薩が各々別々に發させらるゝ願である故別願といふ。釋迦の五百の大願の如き、藥師の十二の上願の如きが別願といふ者であります。今阿彌陀如來の別願といふが、四十八願であります。此の四十八の別願は、どうして發させられたかといふに、元祖聖人は大經正宗分の文を引かせられて、彌陀の別願の緣由を委しくお示し下されてある。久遠古成の阿彌陀佛が、果後の方便として、法藏菩薩と成下り給ひ、衆生を救ひたいの御慈悲より、世自在王佛の力を借らせられた。こゝが氣を付けねばならぬ所

で、淨土眞宗の他力の法門は、彌陀選擇の本願からが、他力によりて發させられた。本より久遠古成の阿彌陀佛ならば、知り給はぬ筈のない事を、斯の義弘深にして、我が境界にあらずと、御師匠の世自在王佛になげかけたまひたは、選擇本願の根本が、既に他力である故に、彌陀の淨土に往生を願ふ者ならば、ごこゝ迄も他力によらねばならぬといふ事を、お知らせ下されたものであります。その選擇のありさきは、正信偈に「法藏菩薩因位の時世自在王佛の所に在て、諸佛淨土の因國土人天の善惡を睹見し」と宣ひ。二百一十億の諸佛の淨土から、善い處を撰取り、惡い處を取つて捨て、遂に恢廓廣大超勝獨妙と、諸佛の淨土に勝れたる淨土をば、私の爲に、西方へお構へ下された事でありませう。次に正しく選擇本願の相を頂けば、四十八願悉く撰擇本願に違ひはなければ、元祖聖人は略して第一、第二、第三、第四の四願と、第十八願との五願の相をお

示し下されてある。彌陀の御慈悲は廣大なれども一と口にいへば拔苦與樂といふて衆生の苦を抜いて樂を與へてやり度との思召より外はない。第一が無三惡趣の願で第二が不更惡趣の願である。我が淨土へ往生を遂げた者ならば三惡趣の名も聞かせまい再び三惡趣に戻る様な事はあらせまいとお誓ひなされた。此の二願が拔苦の願であります。第三が悉皆金色の願第四が無有好醜の願である。我が淨土へ往生を遂げた衆生なら皆黄色一色の肌にして容貌も好いの醜いといふ差別のない様に皆一樣に平等の形色を與へようとなつて、十方淨土の中より善妙の國土を選ばせられた。此の二願が與樂であります。其の他の諸願は略してあるが此は前にも申す通り拔苦與樂の彌陀の御慈悲は此の四願で現れて居ます。此の彌陀の拔苦與樂の御慈悲は何處で受取るかといへば、其の受取り場處を御示し下されたのが、

第十八の念佛往生の願であります。諸佛の淨土に參るには或は布施を以て往生の行とする淨土あり。或は持戒を以て往生の因と誓はせられた佛もあり。或は禪定或は忍辱或は精進或は智慧を以て往生の因となさるゝ佛もあり。其の他種々なる行を以て往生する淨土もあり。然るに今夫等諸行を撰捨て念佛の一行を撰取りて下されたが、此の第十八願であります。已上の五願を擧げさせられて、一往撰擇の相をお述べあらせられて、さて次に問答を擧げさせられて、能惡を撰捨て、善妙を撰取り給ひしといふ彌陀の願意は聞えたが、こゝに聞へ難いのは布施持戒等の六波羅密は是大乘菩薩の行にして結構至極の勝れた行ではないか、今何故に此等の行を捨て、唯念佛の一行を撰取るやとの問である。夫に答へさせられて、聖意測り難しといふて、愚痴の法然が彌陀の聖意を推測るなどは、恐多ひ事なれども、今試に二義を以て

伺ふて見たいとの御意であります。其の二義とは、一に勝劣の義。念佛は勝とすぐれてあり、諸行は劣とおとりである。其の故は名號は是萬徳の歸する所也と仰られて、彌陀の名號は諸佛の名號とは違ふて、因位の萬行果地の萬徳、悉く六字の中に攝在し萬徳の其の體名號六字にして、しかも南無の二字は、行者能機の信相である。名號成就の其の時に、行者の信する機相までも成就したまひて、之を以て彌陀御自身の名號となされ、其の萬徳の有丈を發願廻向と與へて下さるお働きは、諸佛並々の名號でいたゞかれる事ではない。實に此の萬徳所歸の御一言が難有い所で、超世无上の本願であるといふ事も、此の御一言でいたゞかれるのであります。其の故は今迄の所では、四十八願皆撰擇ありといふて、此の第十八願も餘の四十七願と同様に、肩をならべて、十方淨土の行の、其の中から念佛の一行を撰

取りたまひたといふ迄で、未だ超世无上といふわけにゆかない。然るに此處に來りては、餘の四十七の撰擇を皆此の十八願に歸せしめて、四十八願中の王本願となされたのである。元祖聖人は常に第十八願の一本槍で撰擇本願といふたら、必ず第十八願に限るのであります。故に此の十八願をば、又別願中の別願とも、御讚嘆申す次第である。棟梁柱等は家といふ一言の中に攝る。念佛は萬徳の所歸なれば家の如く餘行は、一々の梁柱の如くなれば、六度も十波羅密も、其の他一切の諸行も皆念佛の中の一々の行に外ならぬ。故に念佛は勝にして、餘行は劣であるとの御意であります。二に難易の義。此は餘行は難にして、念佛は易であるとの仰であります。眞如實相の理を觀するといふが如きは、障り多き衆生、輕佻浮薄の衆生の心識では出來る事ではない。又餘行も利益がないではな

れども行住坐臥時處諸縁をえらばずに修せられるものではない。下根の衆生もあれば上根の衆生もある。上根下根をこなべて平等に往生せしむるには、勝劣を比べても難易を比べても彌陀他力の念佛に限るとのお示しであります。

此で一通り彌陀撰擇の願意はお話したやうであります。皆さんどうぞです。帽子のための頭ではない頭の帽子である。帽子が合はねば頭の方は其の儘にして置いて、帽子の方を直さねばならぬ。本願のための機ではなくて、機のための本願である。衆生の心念に應じて度したまう御親である。一々誓願爲衆生故の御慈悲であるから、下根下劣の我等がためには、注文通りに出来た本願である。未來に望みのある者なら、いたゞかれぬといふ譯はない。然るにひよつとすると帽子が合はぬからとて頭の方を直そうと掛かるやうな間違をやつて

居る方がないとも限らぬ。機の扱ひをする人が全く夫である。砂糖の味はごうであるかと、自分の口を吟味した處で、砂糖の味の出やう道理はない。砂糖の味が知りたくば、砂糖の體を吟味すべきである。信心や安心が暗い我が機を探したとて、あらう筈はない。「一流安心の體」といふこと、南無阿彌陀佛の六字のすがたなりと知るべし信心の體は萬徳所歸の名號である。此の名號が萬徳の所歸なればこそ無願無行の裸凡夫の往生が出来るのである。願行は佛の方に勵んで功は無善の凡夫に譲る。艱難辛苦は親様にさせまして、甘味は私共が頂戴する仕合ものは私共であります。

第三 本願章の下



此の本願章に就いて、元祖聖人の思召に二ツありて、一ツには、選擇の願意をお示し下さると云ふ事と、二ツには念聲是一と云ふ事をお示し下さると云ふ、二ツの思召があると云ふ事で、前回では先選擇の願意に就いてお話を致しました。彌陀選擇の願意を頂けば四十八願廣しといへども、詮する所は衆生の苦を抜いて樂を興へてやりたいと云ふ、拔苦與樂の思召より外はない。「如來の作願をたづぬれば苦惱は有情をすてずして、廻向を首としたまひて。大悲心をば成就せり。」十方淨土の其の中から、龍惡を捨て、善妙を取り難を捨て、易を取り、劣を捨て、勝を取りたまひ。萬徳を封じ込めた名號を苦惱の衆生に與へてやりたいと云ふ、如來作願の思召は、只此斗りであり、依つて元祖法然聖人の思召も、此の選擇集から頂けば法門の義理斗りを明すを以て、此の選擇集の所詮としては御座らぬ。六ヶしき理屈計りを仰らるるのが、

此の選擇集の所詮ではない。疑深き衆生であるゆゑに、此の疑深き私共に疑を滅めて信を勧めること云ふ、勸信誠疑の御親切は、此の選擇集一部十六章段、何處を頂いても充分に溢れさせられて居ります。今此處にも、疑深い私共に、其の疑を晴らさせたいの御親切より、一ツの問答をお擧げなされてあります。其の問の意は、たとひ誓願を發しても未だ其の誓願の成就せぬ御方もある、彼の千手觀音の如きは其である、不取正覺の願はあれども、未だ其の願成就せずして、菩薩の位で居らせられるが。今法藏菩薩は既に其の願成就して居らるゝか、どうかと云ふ問であります。其に答へさせられて何疑ふ事はない。四十八願廣げれど、前にも申す通り、煎じつむれば拔苦と與樂の二つに收まる。拔苦の願の中には、初の無三惡趣の願は、亦無地獄餓鬼畜生諸難之趣と云ふ大經上卷の勝行段の文で、其の成就の相が頂かれる次の不更惡趣の願は、

又彼菩薩乃至成佛不更惡趣と云ふ下巻の文で、其の成就の相が頂かれる。又與樂の願成就の相は、生彼國者皆悉具足三十二相とある御文で頂かれる。斯の如く頂けば始の無三惡趣の願より終の得三法忍の願に至るまで、残らず成就してあらせらるゝものを、何ぞ第十八願に限りて成就せぬと云ふ事があらうか、十八願成就の相は聞其名號信心歡喜の經文で頂かれるではないか、殊に四十八願中一々の願に皆不取正覺の御言葉がある上は、是ほど大丈夫な事はない。必疑を起すなよと云ふ御懇ろなる御化導であります。

時に皆さん能く一ツ考へて御覽なさい。成程八九十迄も生きるやうな長命な人もある。定命から云へば五十年とも云ふ、さりながら、老少不定と縮めて見れば、明日をも知らぬ我が命、いや今夜も知らぬ我が命、いや、只今をも知らぬ我が命、只今も知らぬと機が附いたら、只今

が仕方のない身の上である。只今の仕方がない身の上とは、私は只今知られたが知らせて下さつた親様は、疾の疾より御承知の上で五劫の御思案より、永劫の御修行で、十劫正覺の曉から、四十八願の一々が聲をからしての御呼聲であります。誠に私の機相を眺めて見れば、心常念惡口常言惡身常行惡實に曾無一善の惡根性で丸めて居る。此の曾無一善の本地のなりで佛に成らうなど、云ふ事は、通佛法上の所談でない。然し此は他人が他人を眺めた上の話である。彌陀と衆生の間柄は、眞實の親なり眞實の子なり。眞實の親と眞實の子、親は子が可愛と云ふ、何故可愛のか其の理屈は知らぬ。親は子を不便と云ふ、何故不便なのか、其の譯は知らぬ。若譯や理屈があつて可愛のなら眞實の慈悲とも愛とも云はれない。親子の情愛は無條件である。無理屈である。今阿彌陀如來の御慈悲も、條件附かず理屈もなしに、堅正不却の一念が

子故に迷ふ親の慈悲若く不生者不取正覺若も衆生が成佛せずば我も正覺取るまじと若不生者の兩手を延べさせられ陥ちねばならぬ地獄なら彌陀は落ちて五障の女人何處が何處までも落としはせぬぞ。行かねばならぬ惡趣なら彌陀が衆生に成替り衆生に苦患は受けさせまいと大願成就の其の日から變らせられぬは彌陀の御誓ひであります。次に念聲は一の義をざつとお話し致しますれば是は此の本願章に移り始の時にお話ししました通りに大經第十八願の經文を善導大師の觀念法門や往生禮讚の御釋文によりて元祖上人は御示し下されてある。然るに其の善導大師の往生禮讚の御釋から頂けば經文の乃至十念を下至十聲と代へさせられてある。然れば其の十念の念と十聲の聲とは同か異かと云ふ事に就いて念と聲とは是一ツなりと云ふ事をお示し下されたのが此の念聲は一の御釋であります。ところが此

の念聲は一に就いて文に約すると體に約するとの二ツがありまして、今此の選擇集の元祖上人の念聲は一は文に約する側であります。文に約するときは同じ念と云ふても或は觀念とか或は意念とか云ふ念があるゆゑに其に擇ばせられて今此の第十八願の乃至十念の念は、意に觀する念でもなし意に念する念でもなし口に稱へ聲に現す稱名であるぞと云ふ事をお知らせなされそれで善導大師は十八願の乃至十念の念の字を聲の字に代へて下至十聲と仰られたのであるぞと云ふ御化導であります。其の證據の爲に觀經と大集日藏經(本文には大集月藏經とあれども此は執筆者眞觀房の誤りならんと云ふ)の文を御引きなされてある。先づ觀經では下々品の文に令聲不絶具足十念稱南無阿彌陀佛と説かせられてある。此令聲不絶と云ひ稱南無阿彌陀佛と云ふ聲に現はして稱へる事であると云ふ事は明な事であると云

ふお示しであります。之が文に約する念聲は一で、此の選擇集の上の御釋であります。次に體に約するとは、御開山や蓮如上人から頂くと、文に約する御釋も體に約する御釋もありますが、正しく體に約する念聲は一は、近くは蓮如上人の御一代記御開書の上で頂かれます。念聲は一といふこと知らずと申しさふらふとき仰におもひ内にあれば、色外にあらはるゝ、されば信を得たる體すなはち南無阿彌陀佛なりと心得れば、口も心も一つなり、是念を離れたる聲もなく、聲を離れたる念もなしと云ふ、即ち信行不離の念聲は一であります。大な男が駕籠に乗れば、手も外に出る、是も外に出る、さりながら、中に乗つて居る人が太郎なら、手も太郎なり。足も太郎なり。信を得たる體、南無阿彌陀佛と心得れば、口も心も一つなり。信の得られぬ其の間は、小さな凡夫の迷子であつたが、信の得られた當體に、正定聚の大男となつて、内に無上大利

の功德を貰ふたら、是が外に現はれて居ませうが、信の體、即行の南無阿彌陀佛の體、即信の體たる南無阿彌陀佛、信行本體一なれば、内心の信が自ら聲に現はれて、佛恩報謝の御稱名となる。然も善導大師は、十八願文に乃至十念とあるのを、下至十聲と、乃至の語を下至に代へさせられてある。是は此の經文の乃至は、從多向少の義と申して、命あらんものはあらん限り、憶念の稱名を稱ふべし。若命なければ十聲でもよろしと云ふ事で、乃至の言葉を下至に代へて御釋なされた、幾遍稱へねばならぬと云ふやうな、稱名の遍數には定りはないぞと云ふ事をお知らせ下されてある。御當流で信心爲本の上で、一念多念を相對するとき、御文に、善導和尚の上盡一形下至一念と釋せり、下至一念と云ふは、信心決定の相なりと仰られて、往生の定まるは信の一念。上盡一形の稱名は、佛恩報謝の多念の稱名である。往生の約束は、信の一念に調ふた

第四 三輩章の上  
れば、此の上は命のあらん限り、受けた御恩に底入れせず、懈怠の馬に鞭をあて、ゆるんだ手綱を引きしめて、日送りすべき事でありませぬ。

第四 三輩章の上

三輩章と云ふは、大經下卷に三輩段と云ふがありて、衆生の機類千差萬別なれど、しばらく上中下の三段に分けて、十九の願成就の相を御説きなされてある。其の御文を此處に御引きなされて、前の本願章では、第十八願念佛往生の法を明させられ、此の三輩章では、其の十八願念佛往生の法に入りてくる所の行者の機類をお示し下されたものであります。

先上輩の機と云ふは、彌陀の淨土を願生する行者は、第一五欲の家を

捨て。妻子の愛欲を棄て。心も形も共に出家となり。大菩提心を發して、一向に専ら無量壽佛を念じたてまつり。布施持戒忍辱等の六度の行を修して、是を廻向して、淨土を願ふものならば、阿彌陀如來は諸の聖衆と共に、臨終に御來迎なし下されて、其の行者を御淨土に導き給ふとある。此が上輩の機であります。

次に中輩の機と云ふは、前の上輩の機より劣りて、たとひ出家沙門とならずとも、菩提心を發して、一向に専ら無量壽佛を念じたてまつり。萬善萬行の收まる大功德たる、六度の行は修する事は出來ずとも、在家で出來るだけの多くの善根を修し、在家相應の戒を持ち。塔像を建て。出家を供養し。香華燈明等を以て、佛を供養したてまつり。是等の功德を廻向して、彌陀の淨土を願へば、前の如く臨終の御來迎に預りて、御淨土に導かる。然し中輩の機に對しての御來迎は、眞の阿彌陀如來

ではなくて、彌陀の化佛であるとの事でありませう。

次に下輩の機と云ふは、前の上輩の機は出家である。中輩の機は在家である。今此の下輩の機と云ふは、觀經下三品の惡機であります。出家も出來ず。在家の戒も持てず。一の功德も修する事の出來ぬ機なれども、若發菩提心と、一向專念無量壽佛との行を修して、彌陀の淨土を願生するものは、臨終に、上輩や中輩の行者の如く、ハツキリと御來迎は拜まれねども、夢の如くに來迎佛を拜みたてまつりて、往生を得るとある。是が下輩の機であります。

此の如く一切衆生の機類を上中下の三輩に分けて、十九の願成就の諸行往生を説かせられたのが大經下卷の三輩段の御文であります。時に元祖聖人は、此の三輩の文に、三輩念佛往生の文と云ふて、念佛往生と云ふ札を御附けあそばされてある。念佛往生と云ふは、第十八願に

限る筈である。然るに諸行往生を誓はせられた十九の願成就の文に念佛往生と云ふ標札を掲げ給ひたは如何と云ふに、こゝが豫てお話し申す通りで、元祖聖人は、一願結歸と云ふて、餘の四十七願をこどく、第十八の念佛往生の一願におをさめなさるゝ。そこで十九の願も、十八願に取込んで見れば、諸行往生の願も、遂に念佛往生の願となる。そうなつて見ると、十九の願の諸行往生の機類は、第十八の念佛に入込む機の色となつてしまひます。然るに斯く頂いて見ると、又此處に不審が立ちます。十九の願成就を説かせられた三輩段には、上輩にも中輩にも下輩にも皆臨終來迎を説いてある。若此を十八願に取込んで念佛往生の文とすれば、第十八の念佛往生にも、臨終來迎を待て往生するやうに見へる、其斗りぢやない元祖聖人の御言葉には、明かに、今度の生に念佛して來迎にあづからんうれしさよと、又柴の戸にあけくれか

る白雲をいつ紫の色と見なさんと云へる御詠歌の如き此等の御意から頂くと、吾祖御開山の臨終待つことなし。來迎たのむことなし又善信が身には臨終の善惡をばまをさすと云ふ御意は御師匠の御意に異なるではないかと云ふに、そうではない。此の吾祖の御意が即元祖の御本意である。其の證據は元祖の和語燈錄に「さきの念佛をば空しく思なして由なき臨終の正念をのみ祈る人は多くあるゆゑしき僻胤の事なり、されば佛の本願を信せん人はかねて臨終を疑ふ心あるべからず」と此の元祖の御本意を承けさせられたのが吾祖の臨終待つことなし。來迎たのむことなしとの御言葉である、又元祖の御語に「念佛を信せん人は、臨終の沙汰をばあながちにすべきやうもなきなり」と此の御本意を承させられたのが善信が身には臨終の善惡をばまうさすと云ふ御開山の御意であります。

次に然らば元祖の念佛往生に來迎の益あるやうに仰られるは如何と云ふに此の元祖の仰られる來迎と云ふのは、十九の願の諸行往生の來迎とは違ふて、信する一念に蒙る所の攝取不捨の利益である。親縁近縁増上縁の中では、近縁の利益である。其は元祖の漢語燈錄の御言葉で明に頂かれる、來迎に平生あり臨終あり。其の平生來迎とは觀經の普觀の文に「常來至此行人之所」とお説きなされて、一人居て念佛すると思ふなよ、念佛の草庵は狭くとも、阿彌陀如來は云ふまでもなく、十方恒沙の菩薩聖衆方が雲の如くに集り給ひて常に行者を離れ給はず平生でさへ、御來迎即ち攝取不捨はあるものを、どうして臨終に御捨てなさるやうなことがありませうか。さて此で三輩の文に念佛往生と云ふ札を御附けなされた譯は頂かれましたが、しかし此の三輩の御文を拜見して見れば上輩にも中輩にも下輩にも、三輩皆夫れに念佛の

外に諸行を明させられてある。然ば念佛往生の文、諸行往生の文、念佛諸行肩を並べての標札を掲げさせられそうなものぢやに其の諸行の方をば押除けて只念佛往生ばかりをお擧げなされたは如何と云ふに、此に三意ありと云ふて、廢立、助正、傍正と云ふ三義を以てのお答へがあります。先廢立の義から申せば御當流に於て幾度か先となさるゝ廢立の義は、全く此處を御相承なされたものであれば、殊に大切な處であります。元祖聖人が四十三歳の御時に聖道自力宗の真中に易行他力の淨土宗を御開きなされて、御一代の其の間選擇本願の御弘通も、全く此の廢立の思召より外はありませぬ。廢とは捨てるもので諸行を指す。立とは取るもので念佛を指す。十九の願に諸行を説かせられたは、おんづまりは皆捨てさせて、唯一念佛の第十八願に歸せしめんが爲であります。是は全く元祖の手作りの御意ではない。語は天台

により、善意は善導大師にお依りなされたもので、其の善導大師の思召と云ふは、是は毎々お話しする所で觀經の上では、釋迦如來定散二善の御利益を長々と説せられたが終の流通分に至りては、改めて阿難尊者を呼び出し給ひ定散十六觀の二善法を全く捨てさせられて、只念佛の一法のみ御附屬なされました。是は後に第十二に附屬章と云ふが別にありますから、いづれ其の時に委しくお話しする事に致しましょう。偕善導大師は、此の釋尊の御意を得させ給ひ散善義に之を御釋なされて、釋尊は長々と定散の益を説かせられたが、彌陀選擇の願意から云へば、阿彌陀如來が法藏因位の其の時に、世自在王佛の御許に於ての御選びは定善法ではなかつた。散善法ではなかつた。決して自力の諸行ではあらせられなんだ。只萬善萬行の總體たる南無阿彌陀佛の一法より外はない。然れば釋尊の御こゝろも、定散二善を説かせられる



が御本意ではない、只一向專稱彌陀佛名で、十八願の念佛を稱へさせた  
 いばかりぢやぞと、お知らせ下されてある。漸く歩み習ひの小兒が、二  
 三里もある山路を歩續け得るものではないけれども、歩まにや聞かんが  
 小兒の機ゆゑに、態と歩ませるのは、後に背負はんが爲の親の方便であ  
 ります。要もなき定散二善の法を説いたは、後に大悲念佛の願に轉入  
 させんための、釋尊の御方便。殊に三輩の經文を頂けば上輩にも中輩  
 にも下輩にも、本と是方便の爲なれば、諸行を説かせられてあるのは勿  
 論の事なれど、然し念佛を説かせられた文には、上中下の三輩共に一向  
 專念無量壽佛と云ふて、一向の御語が必ずある。此の一向の語が何で  
 もない文字のやうなれど、彌陀釋迦善導の本意を承けさせられた法然  
 聖人飽迄も廢立の義を貫かせたまはんが爲に、例を引いて、此の一向の  
 語を御釋なされてあります。五天竺に三種の寺あり、一を一向大乘寺

と云ひ、二を一向小乗寺と云ひ、三を大小兼行寺と云ふ。大乘ばかりを  
 學ぶが大乘寺、小乗ばかりを學ぶが小乗寺、大乘小乗を兼學ぶのが大小  
 兼行寺。當に知るべし、大小各一向の言あり。兼行の寺には一向の言  
 なしと仰られて、いま此の經文の一向も亦然り念佛の外に餘行を加へ  
 たら一向ぢやない。既に一向と云ふ上は餘行を兼ねざる事明である。  
 先に餘行を説くといへども、後に一向專念と云ふ。然れば明に知られ  
 たり、諸行を廢して只念佛を用ゐるがゆゑに一向と云ふ。若さうでな  
 いならば、此の經文の一向專念の一向は何とするかと御釋なされて、誠  
 に私共見たやうな愚痴なものに、解り易いやうにと、手近く廢立の眞意  
 をお知らせ下されてあります。あまり長くなりますから、又次回に譲  
 りませう。

第四 三輩章の下

前回でお話致しました通り十九の願成就を明させられた此の三輩章に念佛と諸行とを併べてお説きなされてある。然るに元祖聖人は何故に其の諸行の方をば押除けて、只念佛往生と云ふ札を御附けなされたかと云ふに廢立。助正。傍正の三義ある中、前席では廢立の義に就いてお話を致しかけました。用もなき自力の諸行を説かせられたは、後に十八願に引入れんが爲の御方便である。此が廢立であります。彼の蓮の花は華實同時といふて、外の梅や桃は花の散つて後に實を結ぶけれど、蓮は花と實とが一時に出来てある。苔の間は實は見へぬやうなれど、苔を破つて見れば屹度中には蓮の實が出来て居る。今大經上卷に説かせられた十九の因願も其の如く、御文面の上から頂けば、善

根功德の自力の苔に包まれて、他力念佛の實は見へぬやうなれど、此の三輩章の十九願の成就の御文に来て見れば苔が開けて蓮の華と實とが一時に見える如く、自力諸行の華と他力念佛の實とが明に現れて居ります。然るに花落つて見れば残る所は蓮の實ばかりである。今も一向専念無量壽佛と云ふて、一向専念の語を以て定散自力の花をすて、仕舞つたら、残るものは十八願他力の念佛の實ばかりであります。此が廢立である。

次に助正の義と云ふは助は助行、正は正行である。正行とは念佛であります。しかし此の念佛は自力の念佛であつて、前の廢立の念佛とは大違ひであります。助はたすけると云ふ文字で、念佛ばかりを稱へて居ては懈怠になる事ゆる。其の念佛を助けんが爲に、自力で諸行を勵むのである、お飯ばかりでは食べられないから、副食物を添える。副

食物は飯の爲の助である。或は胃が悪いとか、お腹が減かないとかで、適宜の運動をしたり野に出で、働いて體をこなせば、お飯の味の助となるが如く、自力念佛の行者は往生一ツを未だ受合手がないうるに、常に此の方に弱みがある。弱みがあるから精出して念佛稱へて此の念佛で助らうと力味を入れる。それでも時々懈怠が起るゆるなるだけ懈怠のおこらぬやうにと、御佛を拜むもお勤をするも、お經を讀むも、香華灯明を上げるも讚嘆するも供養するも、其の他前にお話した三輩それの自力の諸行を以て懈怠のおこらぬやうにと念佛を助ける。これ主柱が弱くてならぬと云ふので、添柱をする如くである。此が助正の義であります。今他力念佛の行者は往生一ツは親様にお任せしてあれば思出すたびが往生一定。語出すたびが御助治定。とき／＼煩惱の爲に懈怠がおこりても、大地に倒れたら大地に手をついて起上

るが如く、起つた煩惱を懺悔して、ます／＼親様の御親切が味はれます。次に傍正の義と云ふは。傍とはかたはら、正とはたいしい、念佛は正にして正しい行。諸行は傍にして傍の行である。前の助正の義とは違ひ勿論第一の廢立の義とは全く違ふて、念佛と諸行とを別々に離し、念佛も往生の行なり。諸行も往生の行であると、念佛諸行共に往生の行とたつるのが、此の傍正の義であります。

さて斯の如く三義のお話をして見れば、第一の廢立の義から頂いても、次の助正の義でも、第三の傍正の義でも自力と他力との差別はあれども、いづれも皆念佛が主要になつて居りますから、そこで法然聖人は諸行を説かせられた此の三輩段の文に、其の諸行の方をば隠しておいて、只三輩念佛往生文と看板をお出しなされたのであります。ところが此の三義の中、第一の廢立を取るか、第二の助正を取るか、第三の傍正

を取るか、御文の上から頂いても、自餘の淨土宗は、もろくの雜行をゆるす、吾聖人は雜行をえらびたまふとあれば、助正。傍正といふやうな、雜行雜修は淨土宗の取る所、吾淨土眞宗は幾度も廢立を以て先とする、仍つて元祖聖人は此の三義何れも皆義のある事故、いづれを取るとも、面々の勝手ぢやが、しかし善導大師では第一の廢立の義をお取りになる思召であるとの仰であります。何事も善導大師を承けさせられる元祖聖人ゆゑ、元祖聖人も、第一の廢立の義をお取りになる事は、申す迄もない事でありませう。和語燈錄の中に、本願の念佛に獨立ちをさせて、助をさゝぬなり。助さすほどの人は、極樂の邊地に生る。助と申すは、智慧をも助にさし。持戒をも助にさし。道心をも助にさし。慈悲をも助にさすなり。只生れ附きのまゝにて念佛する人を、念佛に助さぬとは申すなり。これ、ごうも念佛ばかりでは弱いから、諸行を以て念

佛の助けさすなご、云ふやうな助正の義は、元祖聖人のお嫌いであると云ふことが頂かれます。又念佛は本願の行、諸行は非本願の行、其の非本願の行を以て念佛と同様に往生の行とする事は、善導大師の御本意ではない。然らば、又元祖聖人の御本意ではない。其は選擇集一部十六章段の所詮は、只非本願の諸行を選捨てんが爲である事は、選擇本願念佛集と云ふ題號を拜見したばかりでも、元祖の思召は、傍正の義はおきらひである事が明に頂かれます。助正とか傍正とか云は、何だか六ヶしい事をお話するやうなれど、皆さん方の中にも、往生に望みは掛けながら、未だ信の得られない人の中には、助正の人、傍正の人、澤山あるかも知れぬ。御慈悲深い親様とまでは頂けども、ごうも此の儘なりでは、何だか物足りないやうな機がして、兎角我機に手放しが出来ぬ、我機に手放しが出来ぬと云ふは、殘念な事には、そりや未だ十八願の

廢立の念佛には入られずに居る。稱ふるばかりでお助けか阿彌陀如来の御本願ぞと聞て稱ふるばかりてお助と信じて、お念佛を稱へよとの御勸めが往生之業念佛爲本の御化導である。「止めなんぞすればいよ／＼妄念起る、妄念起らば起れとうち捨て念佛申すが手にて候起らば起れと打ち捨てる」とはあまりに横着なやうなれど、若後念相續の場所であつたなら、悪事と知つたら蚊の脚一本も折るなと云ふ御誠もある事ゆゑ、常に佛菩薩の仲間入をさして頂いた身の分限を顧みて慎まねばならぬ。が、しかし、信する一念の場所では貪欲の水も瞋恚の焰も悪はあるなりに善はないなりに「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん」と云ふ勅命に向ふて見れば、我の一字は盡十方無碍光如来である。不可思議光佛であると、御開山は愚禿鈔にお知らせ下されました。十方世界にみち／＼たまへる御光明に對しては罪の沙汰も無益

である。妄念の沙汰も無益である。遠慮離れて御慈悲に打ちもたれて念佛相續の身となるならば、これが元祖聖人の此の三輩段の御化導を能く汲み得た行者でござります。

第五 念佛利益章

さて皆さん前の三輩章において、自力の諸行は念佛一行に入らしめんがための方便に已むを得ず説かせられたものゆゑに、萬行圓備の嘉號たる念佛を立て、自力の諸行はいづれ一度は廢つべきものであるといふ事は法然聖人の思召はかりではない。又善導大師の思召はかりではない、釋尊の御本意が、此の廢立より外はないと云ふことを知らせんために、前の三輩章に續いて、此の念佛利益章を御出しなされたものであります。大經下卷の流通分には、佛彌勒菩薩に語りたまはく、其

彼の佛の名號を聞く事を得ることあつて、歡喜踊躍して、乃至一念せんに當に知るべし、此の人は大利を得るとなす。即ち是無上功德を具足すと、斯の如く、釋迦如來は彌勒菩薩を呼出し給ひて、唯念佛の一行を御附屬なされてあります。彼の佛の名號を聞くといふは、聞くとは信ずることである、一多證文にも仰のある事ゆゑ、只大様に聞くのではない、耳にばかり聞いても心に會得の出來ぬやうでは、聞いたとは云はれぬ。何の事やら解りはせなんだ。免に角聞いたと云ふやうな事では、實に最下等の聞きやうであります。法の義筋を能く聞いて、理屈の最も覺へて得意になつて居ると云ふやうな事では、未だ上等の聞きやうとは申されませぬ。六字名號のお由を聞いて六字にどんな力があつて助けられるのやら名號に如何なるお仕掛けがあつて救はれるのやら、そんな事は解らすとも、免に角機を眺むれば、救ふて貰はずには居ら

れぬ處へ覺へぬなり知らぬなりに信ずるばかりで御助けと聞いて、分別離れて信ずるものは、能く機と法とが一致して、六字が其の儘我ものになつたのである。此が最極上等の聞様であります。斯く聞いて歡喜踊躍して乃至一念するものは、無上大利の利益を得るとある。苦になつて、仕方なかつたものが、其の案じ氣のなくなつた相が歡喜である。心に此の安堵を得て、覺へず身に溢出た喜の相が、踊躍であります。大利無上の功德とは、此の流通の經文の次に、善導大師の往生禮讚の文をお引きなされて、歡喜して一念に至るものは、皆まさに彼に生るゝことを得べしとある。かしこに生るゝとは、彌陀の淨土に往生することでありませぬ。然れば大利無上の功德とは、無善無行の丸裸の凡夫が淨土に往生して、佛になると云ふ事である。是程の大功德はない。是程の利益は外にはない。信じて稱ふるばかりで、次生に佛に

成ると云ふ事は、只此の念佛一行取切りの大利益であります。そこで前の章に念佛と諸行とを并べながら萬善萬行は廢てもの、只念佛の一行のみを取れと云ふ元祖。善導。釋尊の思召が、此の念佛利益章に來つて明に頂かれる事であります。時に此處の乃至一念と云ふ一念は、元祖聖人の御意では、口にかけて稱ふる行の一念であります、十念百念を待つて定まる往生ではない。名號のお由を聞いて信じて只一聲稱ふるばかりで、直に往生が定まるこの思召であります。これもと元祖聖人は念佛爲本のお勧めであつて、元祖の御時代と吾祖の御時代とは、其の時代の違ひによりて、元祖は念佛爲本、吾祖は信心爲本と、只裏と表との違のみであつて、其の思召に至りては、同じ事であると云ふ事は、すつと前にもお話ししたやうであります。何分元祖聖人の御時代は右も自力宗、左も萬行宗、其の自力萬行の聖道諸宗の真中に、信心爲本など、

申出た處で、なか／＼受附けられるものではない、そこで念佛爲本と、他力一行宗をお勧めなされ、御自身におかせられても、日に六萬遍の念佛を稱へさせられ、御臨終間近くならせられては、また一萬を増して七萬の念佛を稱へさせられました。然し此の念佛は、信に離れた念佛ではなく、和語燈錄の中のお話に「今度彌陀の本願に逢へることを行住坐臥にも報すべし、彼の佛の恩徳を」と云ふ仰もあれば、六萬七萬のお念佛は、全く信の上の佛恩報謝の思召と存せられます。元祖は常に、愚痴の法然坊である。煩惱に丸められて居る身であるから、御淨土の蓮臺に手を掛けるまでは、油斷をしてはならぬ、本願に逢ひたてまつりし今の身の嬉しさを思へば、命のあらん限り、懈怠をいましてお念佛を申さねばならぬとは、元祖の口癖の如き仰である。又其の六萬七萬の念佛も和語燈錄に「數を定め候はねば、懈怠になり候へば、數を定めるがよき事

に候と仰られて、只懈怠にならぬやうと云ふ方便の爲に數取りをなさ  
 れたのであつて、數多く稱へるので、念佛の功德の勝れると云ふ思召で  
 はさら／＼ない事であります。其は又の御語から頂くと、たゞ相續せ  
 んがためなり、數を要とするにはあらずと云ふ仰がある。然れば元祖  
 聖人の稱へさせられる、數多くの念佛は、數が主要ではなくて、相續と云  
 ふ事が主要である。然るに元祖の御滅後、自餘の淨土宗は、元祖の御意  
 を汲損ふて、數取りが主要になつて居る。吾が御開山は元祖の御本意  
 を受けさせられて、數取りではなくて、相續の方を御相承あらせられた、  
 唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩、往生は信の一念に定りたれば、其の御  
 恩報謝のため、命のあらんかぎり念佛相續せよとの御化導であります。  
 又念佛相續の出来る人ならば、是程往生に儲な證據はない。昔の羸ら  
 い御人方の中には、臨終に紫雲が柵引いたとか、異香が薫じわたつたと

か、いろ／＼の瑞相もありましたが、法然様は紫雲よりも異香よりも、念  
 佛ほどの儲な往生の證據はないと仰られました。其は其の筈であり  
 ます。此の念佛は、只の念佛ではなくて、憶念の稱名であります。憶念  
 であるから、彌陀と衆生との間には、絶えず思ひやりが通ふて居る。寐  
 ても起ても、立つても居ても、彌陀と衆生との關係は、常に密着して難れ  
 はせぬ。煩惱の怨敵のために、時々物淋しい感が起りましても、一念大  
 悲の御膝許に立歸れば、忽ち氣も勇み心も強く、憶念の上から出る念佛  
 でありますから、百萬の魔軍も襲ふ事の出来ぬ大力があります。此の大  
 力は他力であります。信じた後に他力に成りたのではない、依舊青山  
 本是春と朱子が吟せられた如く、春の景色の満ちた青山は、眺めた後に  
 出来た春ではない、眺めぬ前から春に成りて居る。彌陀の五劫永劫の  
 御苦勞は、只私一人の爲なれば、信じた後に始めて成る他力ぢやないよ



第六 特留念佛章  
一四二  
く、他力のお手廻しの掛つたものであると存じて、無上大利の功德利益を具足したる念佛の行者に成られた仕合せを喜ぶべき事であり  
ます。

第六 特留念佛章

前の利益章では、念佛は諸行とは異りて、如何なる機類でも、大り無上の功德を得ると云ふ事をお知らせ下されましたが、しかし其の利益でも、何時から何時までと云ふやうに、時に限りがあつては、其の時に生れ合はざるものは、其の大利益を得る事が出来ませぬ。そこで、此の第六段には、特留念佛といふ一章をお擧げなされて、餘の經道は、ことごとく滅盡しても、此の念佛ばかりは、末法萬年の末、いつまでもこのころぞと云ふ事を、大經の文を證據に引いて、お知らせ下されたのが、此の一章であ

ります。即ち經文に「當來の世に經道滅盡せんに、我慈悲を以て哀感して、特に此の經を留めて、止住すること百歳せんに、それ衆生あつて、此の經にまう値ふもの、意の所願に隨つて皆得度すべし」と御説きなされてある。此の經を留るとは、大經の所詮は、念佛でありますから、末の世に聖道の諸教は廢りても、念佛ばかりは、慈悲を以つて留めおかんと、御意てあります。法然聖人は、此の經文に就いて、第一聖道淨土二教住滅前後。第二十方西方二教住滅前後。第三兜率西方二教住滅前後。第四念佛諸行二行住滅前後と云ふ、四重の比對と云ふ事を明させられてあります。要する所は、此の界の衆生は、聖道門には縁が薄く、淨土門の教には縁が深い、縁が深いから、縁の淺い聖道の經道は廢りても、此の經の念佛はかりは、いつまでも留ると云ふ仰であります。

皆さん、なせ我々は、聖道の諸道には縁が薄いのでありませうか、こゝ

は一ツ考へて見なくてはなりません。希臘の大哲學者ソクラテスと云ふ人はこう云ふ事を云つて居る。予は實に愚者である、世の中の一切に就いては何一ツ知る事は出来ぬが然し、只一ツ知つて居る事がある、其は「我は無智である」と云ふ事である。何も知らぬと云ふ事だけは、知つて居ると云ふ事でありませぬ。此は實に味ふべき語にはありません。汝自身を知れと云ふ事を云はれて居ります。自分自身は如何なるものであるかと云ふ事を段々考へて行くと、遂には價値のない、能力のない、無智無力のものであると云ふ事に到達致します。人間は學問すればするほど、修養を積めば積むほど、ますます自己のつまらない事が知れて來れば、どうしても、他力に頼らなければなりません。して見ると、人間のおんづまりは他力に歸せねばならぬと云ふ事になつて來ます。自力の諸教

には縁が薄く、他力の念佛には縁が深いとは、能く仰られたものではありませぬか。私共は實に無智であります。無力であります。若し之が反對に淨土他力の念佛は滅盡しても、聖道自力の諸教は残ると云つたならば、そりや大變であります。しかし、あてはまるものは残りて、あてはまらないものは盡ると云ふ事は、自然の道理であります。御和贊に「經道滅盡ときいたり、如來出世の本意なる、弘願眞宗にあひぬれば、凡夫念じてささるなり。」下根の機にあてはまるやうにとて、易行他力の淨土念佛を説かせられたは、釋尊の世に出でさせられたる御本懷であります。折角五十年間説かせられた、八萬四千の法門は廢りても、彌陀の悲願が弘まれば、それが釋尊の御本意である。そこで大經をお説きなさるるときは、如來の光瑞希有にして、阿難はなほだこゝろよく、如是之義とこへりしに、出世の本意あらはせりと非常な御喜びの相を以て、お

説きなされました。彼の法華では釋尊が四十餘年未顯眞實と云ふて、四十餘年の間未だ更に眞實を説かなんたが今は一大事因縁を説くぞこのたまひて無量義處三昧と云ふ定に入らせられ大光明を放つて説きたまひたが法華經であるから釋尊出世の本懷は法華經を説かせられんが爲であると云ふて居る。成程法華經も出世本懷に違はない。さりながら之は教の權實に約すると云ふて釋迦如來の本懷は一佛乘の實教を説かせられんがためであるから法華經以前の三乗の權教に對しては實教たる法華經は儘に本懷に違はないがしかし實教が佛出世の本懷なら淨土門に於ても定散要門の權教に對して本願一實の念佛の法は實教であるから同く釋尊の出世の本懷である。斯の如く云ふて見れば法華經も大經も其の價値は同じものゝやうであります。しかし法華經では聲聞緣覺までは救はれるけれど無智の凡夫五逆の

惡人迄残らず救ふと云ふお法は大經でなくては頂かれませぬ。今一步進んで頂いて見ると釋尊は如何なるところから此世に御出世なされたものでありませうか豫て御聽聞の通りに阿彌陀如來の四十八願の中では第十七願は諸佛稱揚の願或は諸佛咨嗟の願と云ふて十方の諸佛に我か名號を讚嘆稱揚せんと誓ひたまひたが第十七願であります。其の諸佛稱揚の十七願の名號を私共が頂いて信じて稱ふれば正しく往生の正因となると云ふのが第十八願であります。然るに彌陀の誓願虚しからずして其の第十七願に酬ひ現れたまひて六字の名號を稱揚讚嘆して御說法なされたが釋尊であります。斯の如く頂いて見れば前では法華が出世の本懷なら大無量壽經も出世の本懷である。聖道と淨土とを二ツ並べて比べた上でのお話してあります。今では彌陀の第十七願に酬ひ現れ給ひた釋尊なれば一代五十年間の

御説法、豎に説きたまひしも、横に説き給ひしも、聖道教である淨土教である、二ツの比べものがあるのではありませぬ。たゞ、五十年間の御説法は、御念佛より外はないのでござります。それは何故かと申しますれば、第三本願章の時にも、お話致しました如く、例へは名號は家の如く、萬善萬行は家の中の一々の梁柱椽等の如くである。家は柱椽等の總體である。蓮如上人の御文に、名號は萬善萬行の總體なれば、いよ／＼たのもしきなりとの御化導の如く、萬善萬行の總體は南無阿彌陀佛の御六字であります。然るに衆生の機椽の未だ熟せざる間は、止むを得ず、名號の中に含まれてある所の、一々の少功德たる萬善萬行を説かせられたのであります。然れば、聖道八萬四千の法門は、南無阿彌陀佛の御六字の腹の中より、分れ出たる功德なれば、餘の一切の萬善萬行は、皆念佛胎内の功德であります。かく聽聞して見ますると、法華で

あらうが、涅槃であらうが、其の他一切の法門は、皆名號六字の本来に歸り着く迄の釋尊の善巧方便であります。私共は今幸に方便の權教に止まらずして、釋尊の特に御慈悲を以て留め給ひたる念佛のお由を頂きて、彌陀弘願の本来に歸り着き、御親の御懷の中に、風も知らず、波も知らず、安き眠りをさせていたゞく、今の身の仕合せを偏に喜ぶべき事でありませぬ。

第七 攝取章

世の中に尤尊きものは父である。世の中に尤も難有きものは母である。五十年の人世でさへ父のなき子は、不仕合せであります。母を失ふた子は、憐むべきであります。私共は現世から未來にかけて永き時間、いとも尊く、いとも難有い父と母とを持て居ります。此を知ら

すに暮す人は不幸中の大不幸であります。父は南無阿彌陀佛の御六字であります。母は阿彌陀如來の八萬四千のあたゝかき大光明であります。人生五十年の行路には、失望、落膽、狐疑、恐怖などの荆棘がそこかしこに横はつて居る。が然し、恐怖中の恐怖問題中の大問題と云ふは死と云ふ事である。御經の中には、大命將さに終らんとするとき、悔懼こも／＼至るとお説きなされてあります。死は、人間萬事の最終でありて、又荆棘の中の尤も大なる荆棘である。此の大なる荆棘さへ御佛によりて切り抜いていたゞけば五十年間の他の小なる荆棘は信心に慰められて自ら切去る事が出来ます。然ばどうしたら信心は得られるであらうがどうしたら得られるであらうかは造作である信するには造作はいりませぬ。お腹の空いたときに、お膳を据へられながら、どうしたら、びもじさがなほるだらうかなど、は云ふては居れ

ますまい。只振向いて箸を取ればよいのである。窓を後ろにして部屋の方の方に斗り向つて居ては太陽の光は見へませぬ。佛にお向きなさい。自力で我機の闇の方に向く事を止めて佛の方へ振り向きなさい。御佛は常に救の御手を垂れてござる。思ふ事が叶はねば失望し落膽する。狐疑とか恐怖とか煩悶とかは、光に背いた闇の方から来る。よしや種々の方法で是等の苦痛を去る事が出来ても、眞の光から来たのではないから、世間の樂はあてにはならぬ。變らぬ満足變らぬ安心は、佛に頼らなければなりません。佛は失望、落膽を根本から癒して下さる、所の満願の徳者であります。狐疑、恐怖を根本から除いて下さる所の破闇の徳者であります。満願は名號の徳であり、破闇は光明の徳であります。此の名號の内因と光明の外縁即名號の父と光明の母との因縁和合によりて信心といふ子が生れるのであります。其

の名號の父の尊さは段々御話を致しました。今は光明の母の難有さを、お示し下されたのが此の第七の光明攝取章であります。觀經の眞身觀の光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の文を此處にお引きなされて彌陀の光明には信前の一切のものを照し給ふ色光と特に信後のものを照し給ふ心光と義に於て二つの差別はありますが體は色光も心光も別にはありません。さて阿彌陀如來の光明は餘行のものを照し給はずに、只念佛の行者のみ攝取し給ふ。もの阿彌陀と云ふ御名前が、諸善萬行の自力の行者を照し給ふのでな迷て念佛の行者のみ攝取し給ふ邊から阿彌陀と云ふ御名前は出來たのであります。然るに何只念佛の行者のみ攝取し給ふと云ふに、法然上人は此に就て二つの意を以てお示し下されてあります。一には親縁、近縁、増上縁と云ふ善導大師の定善義の三縁釋を御相承なされてあります。此の三縁釋に就

きましては今迄幾度もお話したやうであります。今又ザツと繰返して見れば親縁とは彌陀と行者と心の上に就て親しき關係をお示し下されたものであります。衆生が口に稱ふれば佛は之を聞き給ふ。身に禮すれば佛は之を見給ふ。意に念すれば佛は之を知り給ふ。行者の三業と佛の三業と相離れざる相が親縁であります。又心許りでなく體の上でも常に行者の身を去り給はず。即體の上で親しき關係をお示し下されたのが近縁であります。元來惡で固めた凡夫でありますから、信前の心も信後の心も起る煩惱には變りはなければ、信後の煩惱は往生の妨げともならず。魔事なく佛果に到達するのは増上縁であります。此の三縁はもと佛の方に三遍と云ふが、ありまして佛の大悲心が、法界の衆生の心内に遍満したまふ心遍と、又佛の御心のみならず、其の御身までが、あらゆる衆生界に遍満してござる身遍と、又佛の大

業用は心の至り給ふ所御身も亦至り御心も障りなく自由に法界の衆生を濟度し給ふ無障礙遍ご此の心遍身遍無障礙遍の三遍が特に念佛の行者に向ひ給ふ時親縁近縁増上縁の三縁と成つて顯はれてくださるのであります。斯るお由があるから餘行のものを照し給はずに特に念佛の行者を照したまふご云ふの仰であります。次に第二の御意では元來阿彌陀如來は餘行を誓ふが御本意ではない。念佛が正しく本願の行である。凡夫往生の正因として誓ひ給ふたは只念佛の一行である。然れば餘行は非本願の行である。故に念佛の行者を攝取し給ふごの仰せであります。さて我々は儘に光明に攝取せられて居るかどうか一つ吟味をして見ねばなりません。御開山の仰に「往生に疑のなくなりて候は攝取せられまゐらせたるゆゑと見へて候」とあれば昨日思ひ出して、此の信願終まで相續しておもがはりのない

のが攝取せられたる第一の證據であります。變らぬ心が變らぬのではない、變る心が變らぬ御慈悲に計はれて居るからである。如何に瞋恚の炎は燃へても如何に貪欲の波は逆巻いても飛でも跳ねてもどうして見ても彌陀のおん計ひ以上に出る事は出来ません。此の頃は随分蚊が出て來ましたが如何に寢行儀の悪いものでも部屋一杯の大きな蚊張の中に寝たらいくら飛んでも跳ねても蚊張の外に出て蚊に食はれる氣遣はありませぬ。八萬四千の大光明の中に攝取せられた身の上は願力無窮にまします。罪業深重もおもからず。佛智無邊にまします。散亂放逸もすてられず。無明長夜の灯炬なり。智眠くらしとかなしむな。生死大海の船筏なり。罪障をもしとなげかされ。右に逃げて御慈悲であります。左に逃げて御慈悲であります。前も後も御慈悲であります。御慈悲と御慈悲に追詰められて、光明攝

取さ抱き込まれた身の上ならいかに地獄へ落んと思ふとも我が計ひにては、よくく地獄へは落ちられぬことになりました。是が光明のおん母の有難きお働きであります。

第八 三心章の上

第八 三心章の上

さて此の前の擣取章は、光明の利益。其の前と又其の前の特留章と利益章との二章は、名號の利益をお明し下されたもので、名號の因と光明の縁と因縁和合して信心が得られるのでありますから、其次節によりて、今は信心を御明し下されたのが此の第八の三心章であります。又總じて申しますと、第二の二行章より此の前の第七擣取章までは、只念佛をお明しなされたものであることも頂かれます。然るに、其の念佛は只の念佛ではない。稱ふる念佛には自然と三心が具してある。若

三心の具せざる念佛ならば、それは自力の念佛である。他力の念佛は裏を返せば必ず三心が具はつて居るぞと云ふ事をお示し下されんがために、前に長々念佛をお明しなされて、今此の處に、信心をお明しなされたものであります。吾祖御開山が眞實信心必具名號と仰られて、信心にはお念佛を離れぬものであると仰られ、又名號は必ずしも信心を具せずと仰られたのは、其の念佛に自力と他力があるからである。自力の念佛に他力の信心のあらう筈はない。そこで他力の念佛には、自ら三心が具して居らねばならぬと云ふ元祖の御化導と、他力の信には、必ずお念佛が唱へられねばならぬと云ふ吾祖の御化導と、其の思召は全く一つであります。さて其の三心と云ふは至誠心と、深心と、廻向發願心でありまして、觀經には、一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心。三心を具すれば必ず往生を得とお説きなされてある。此の經文をお

第八 三心章の上



擧げなされて、次に善導大師の散善義と往生禮讃との釋文をながく、  
 とお引きなされて、他力の念佛は此の三心の上の念佛であるぞと云ふ  
 事をお示し下されたのであります。御開山の思召から頂くと此の三  
 心に自力の三心と他力の三心とがありまして、御和讃に定散諸機格別  
 の自力の三心ひるがへし、如來利他の信心に通入せんとねがふべしと  
 未だ他力に入り兼る聖道定散諸機のために、自力の三心を説かせられ  
 たは佛の御方便、終の流通分に至りては自力の三心を翻して、他力の三  
 心に通入せしむると云ふが佛の御本意であります。

さて第一に至誠心といふは、至とは真なり、誠とは實なりと仰られて、  
 至誠心とは眞實心であります。然るに、此の眞實に就いて、自利眞實と  
 利他眞實との二つがあり、其の自利眞實について、又聖道門の自利眞  
 實と淨土門の自利眞實とがありますが、何れにしても、自利眞實とは自

力の眞實、利他眞實とは淨土門中如來他力の眞實であります。其の自  
 利眞實の自力を捨て、利他眞實の他力を信せよといふが、此の至誠心の  
 御釋である。御當流の御化導に於て、惡業煩惱の身ながら、信するはか  
 りで、御淨土參りとは、これから頂かれるのであります。元祖上人が長  
 々とお引きなされた此の善導大師の御懇なる三心釋は何とも云へね、  
 難有い御化導と頂かれます。先至誠心の御釋から頂けば、身に口に意  
 に修する所の行者の自力の安心起行は、眞實報土の間には合はぬから、  
 如來眞實の心中に作り給ひし御親切を其の儘用ひよどの御であります。  
 す。そりや何故かと云へば、次の御言に、外に賢善精進の相を現すこと  
 を得ざれ。内に虚假を懐けばなり。貪瞋邪偽奸詐百端、惡性侵め難き  
 こと蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も、雜毒の善と名け、亦虚假の行と名  
 けて眞實業と名けざるなりと仰られて、見かけは愚であつても、惡であ

つても懈怠であつても、内心が賢で善で精進であるならば、出離の要道に間に合ひもせうが、如何に賢そうな振をして、善かりそうな振をして、精出して勤めそうな振をして、内心を發いたら、虚假おかりぢやないか、至らぬ奸詐もなく、至らぬ邪偽もなく、貪らぬ欲もなけりや、腹立てぬ日もなく、止め難き悪性は蛇蝎の如しである。如何に氣強りても、骨折りても、氣狂の作した仕事なら、其の仕事迄が皆間違つて居るから、間に合はぬ如く、急走急作して、恰も頭然を炙くが如しと云ふて、頭髮に火の附いたのを拂ひ落すが如くに、朝から晩まで、如何に急いで氣張つてやつて見ても、本が悪で固めた凡夫ゆへに、勤めた善は、皆雜毒の善である。修した行は、皆雜毒の行である。此の毒まじりの善や、行を彌陀の淨土に廻向して、此で參らせて頂かうと掛つても、そりや間に合はぬ。凡夫自力の企ては如何に骨折て見ても間に合はぬ。さあ間に合はぬ。

こなつたら如何せう、時間は遠慮なしに移行く、殊に出息入息不待命終とあれば、今をも知れぬ命である。今をも知れぬ命と氣が附いて見たら、只今は仕方がない身の上である。只今の仕方が無身の上と、私は只今知られたが、只今知られたとは、そりや遅い、受取りたまふ親様は、今の仕方のない身をば昔から疾くに御承知の上で、法藏比丘の因中に於て、行者の作してならぬ。不善をば不生欲覺瞋害覺と、あなたの手許で勤たしな、んで下され、行者の勤めねばならぬ、善根をばあなたの手許で勤めて下され。其の勤めぬいて、出来上り給ふたものが、南無阿彌陀佛の御六字である。此の六字は、私の貫物である。貫ひ物の六字が、其の儘淨土參の因となる。三年五年苦んだとて、私共の自力は間に合ふ眞實ではない。そんな張合のない、自力に掛らうよりは、間に合ふやうに仕立上げた、御六字を、其の儘項だけよこある御化導であります。皆さん思

ふて御覽なさい。向ふを見れば十七八の娘が立派な服装をして、僅に洋傘一本さして歩行て居る。其の後は五六十歳位の老爺か、重荷を擔いて汗流して、然も重荷を重しとせすに、女の後姿を眺めて、樂しげに、「こい、笑ふて附いて行く。聞いて見たら、前のは娘で、後のは父である。嗚呼親なればこそ子なればこそ他人で出来ることではない。大經には「荷負群生爲之重擔」とお説きなされて、萬行は佛の方に觸んで、感果は無善の凡夫に讒る、艱難辛苦は親様にさせまして、甘味はこちが頂戴する。親に兩掛擔がせて、しかも娘は洋傘一本さへ厄介さうにさして行く。五劫永劫の御苦勞は私一人がさせながら、御恩報謝の起行作業でさへ厄介で面倒で仕方のないやうな氣持がする。どこ〜までも、我儘ものは私であります。こんな淺間敷い根性持ちながら、自力の計を間に合はせ、彌陀の淨土へ運ばうとする料間は、恐れ入つた次

である。悪はあつても、善はなくとも、善悪あるなしの思案を止めて、彌陀の御實意を頂いて見れば、千年の間閉籠めた暗室でも、僅にマツチ一本の火で明るくなる如く、無始以來今日まで、悪業煩惱に閉籠められた暗い私共の胸も、只信する一念で、佛心凡心一體となる。今迄の不實も、悪性も、暗黒も、大悲の御膝許へ向ふ時は、眞實となり、善性となり、光明となるゆへに、内心に虚假を懐きながら、賢人振つたり、善人振つたり、事を止めて、身も心も有りだけを彌陀の他力に打ち任せ、貰ふた六字を因として、彌陀の淨土に往生せよと、御懇ろに御化導下されたのが、此の至誠心の御釋であります。

第八 三心章の中

三心の中初の至誠心は終りて、次が深心であります。此の觀經の深

心を善導大師は「深信之心也」と御釋なされて、深廣なる佛果を求むる心であるから、深心と云ふのでもなけりや、深い眞如の理を觀する心ゆゑ、深心と云ふのでもない、不了佛智の疑晴れて、本願名號の由を深く信する心であるぞその思召で、信の一字を加へて、深く信するの心也と御釋遊ばされたのである。此が本とありて其の深く信する相に就いて、七深信六決定と云ふ御釋が出て居ります。其の七深信とは、

第一機の深信。此は豫て御聽聞の通り、自身は現に罪惡生死の凡夫、今始て迷ふたぢやない、曠劫より己來迷ひつめの凡夫にして、无有出離之縁の徒者なりと、我が機の淺間しさを見限りつめる相であります。

第二法の深信。我が機をわがむれば、助りそうもない奴かれど、彌陀の攝受衆生の願力でお助けに預ることの嬉しさよと、彌陀の願力を深く信する相が法の深信であります。

第三に佛説を信する。上の法の深信は大經に説てある彌陀の第八願の佛願を信する。今此の第三は觀經に彌陀の淨土の依正二報を説てあるのは、只私をして彌陀の淨土を慕はしむる爲の釋尊の御方便であると雜有く信する相であります。

第四には佛證を信する。即阿彌陀經を信することである。阿彌陀經には、六方恒沙の諸佛方が各廣長の舌相を以て、彌陀の本願念佛を信するものゝために、一々證據に立て下されてある。

第五は佛語を信する。こゝで一つお聞き下さい、初の第一機の深信は、除いて第二の法の深信より、今此の佛證を信する迄は、初の法の深信は大經の彌陀の佛願を信じ、次は觀經釋迦の佛説を信す、次は阿彌陀經の諸佛の證誠を信する。即御經で云へば、大經觀經阿彌陀經の三經の次第であり、佛で云へば彌陀釋迦諸佛の三佛の次第であります、此は善

導大師の思召のある事で、豫てお話し申す通り、彼の通論家の如きは、他力の親心が解らず行者の願も行も皆六字の法體にある事を知らぬゆゑ、念佛別時意など、立て、稱ふる念佛は速生の宿縁とはならうが、順次の生に直に成佛するとは、そりや以ての外であると云ふ。そこで善導大師は信じて稱へて往生と云ふ事は、淨土の三部經の説相であり、彌陀釋迦諸佛の三佛の一致したまふ所なれば、三經三佛を合して見れば、只釋迦一佛の語である、他人は何と云はうか、只此の釋迦一佛の語を信せよ、釋迦一佛の語を信するものは、彌陀釋迦諸佛の三佛に隨順する眞の佛弟子であるぞとの御意であります。

第六は上の第五の佛語を信する深信を廣くお明しなされたのが、此の第六の深信であります。全体通論家の誤りは、觀經の念佛から起つたものであるが、通論家は菩薩の論の上から證據立て、來るのである、

今此の觀經の念佛は、大經十八願の念佛である、此の念佛は阿彌陀經の諸佛證誠の念佛である、通論家は何と云ふても、彼は菩薩の論である、是は佛の説であるから深く信せよ、若菩薩と佛とを比べて見れば、佛は大悲を満足してござる御方である、菩薩にも慈悲がないではなければ、佛の慈悲に比べれば小であると智度論に云ふてある。又佛は實語のお方である、菩薩は未だ諸法の源底を證盡し給はぬお方であるから、未だ疑惑心中の語であつて實語とは云はれぬ。佛は果上である菩薩は未だ因位であるから、ものが未だ定らぬ、其の菩薩の論を以て證據とする通論家の諸師達であるから、自ら誤り他人をも誤らせる、今此の佛説を信するものは、自分は勿論決して他の衆生を誤らせる、氣遣はないから、心置きなく信せよと、御懇ろにお示し下されてあります。

第七の深信は立信の相を明すと云ふて、自分の信心の大丈夫に成就

する相をお示し下されたものであります。此の第七深信に就人立信と就行立信と云ふ事がありますが、其中中就行立信とは念佛の行に就て信を立つる事で、此は既にすつと前の二行章の明し方がそれであるから、今茲には除いてあります。今就人立信に就て云へば、就人の人とは、説いて教へて下さる釋尊の事であり、此の釋尊の教に就て深く信を立つると云ふのが、就人立信であります。此の下に四重の破人と云ふを擧げてありまして、彌陀の本願念佛を信する人に對して、他から色々の妨難の來る事を四通ほど擧げて、以て信心堅固の相をお示しなされてあります。其中第一の難は實難と云ふて、聖道門の人達から種々の經論を以て證據立て、來て彌陀の本願念佛の信者を翻さうとするのであります。次の三難は善導大師が假りに設け給ひし難であつて、假令他から如何なる難が來ても、決して動くなと、以て信者を勵し

て下されたものであります。

其第一の難と云ふは、別解別行の人即ち聖道門の人達から、華嚴法華維摩等の諸經と以て證據として、此の經を見よ、无善无行ばかりでなく、寐でも覺めても、惡業をのみ造りて居る泥凡夫は、淨土往生などは決して相成らぬと難じて來るのである。夫に對して善導大師は、斯答へよと答へ方まで委しくお知らせ下されてある。其の答は、成程我等も汝の經論を信せぬではない、然し汝の經論にも、時別處別對機別利益別と云ふ四別があるではないか、時別とは此の經を説く時と、彼の經を説く時とは時が違ふ處別とは處が違ふ對機別とは對手が違ふ利益別とは對手の受る利益が違ふ、先づ時別の上から云へば、華嚴經は成等正覺の第二七日に説き、法華經は四十餘年にして説き給ひたではないか、又處別で云へば、華嚴は寂滅道場に於て説き、法華經は耆闍崛山に於て説き

給ひたではないか、又對機別で云へば、華嚴は菩薩ばかりを相手として説き給ひ法華は聲聞緣覺菩薩を相手として説き給ひたではないか、又利益別で云へば、一經々々か、其の說法の振合が違ふから自の其の法の利益も違ふと云ふは當り前である。此の道理は汝は汝の持つてゐる經によりて知つて居る筈である。聖者の説法は時を待ち機を待つ、如何なる法も時到期縁熟せざれば説かれるものではない。法華經では塵點久遠の昔大通智勝佛の時成佛の因を下して置いて、其の機縁が今番法華の時に始めて熟したと云ふではないか、今此の觀經も定善は韋提希夫人の請によりて説き給ひ散善は佛自ら五濁五苦の衆生の爲に其の機縁の到るを見て説き給ひしものにて、釋尊自ら説き自ら證據に立ち給ふ故に、我等は偏に淨土の法門念佛を信するのである。假令汝が百千の經卷を持ち來りて難ずるとも、却て我が信心を増すばかりであ

つて、決して我が信心を損ずる事はならぬと答へよとの仰であります。此が四重の破人の中第一の實難であります。次に善導大師が假りに設け給ひた第二以下の三ツの難とは、先聲聞や緣覺や地前の菩薩が、百千萬人揃ひ來りて、多くの經論を引いて、凡夫の往生を難じて來ても、又次に初地以上十地迄の菩薩が、幾百萬來りて難ずるとも、又最後に、如何に多くの化佛報佛が十方に徧滿して、光を放ち、廣長舌を出して、念佛往生を妨げに來ても、我人念佛行者は、決して之によりて信心の亂動する事なく、ますく決定心を強めよとの仰であります。皆さん、此の邊は能く頂かねばなりません、我くは丈夫に信心を得られたやうでも同じ、凡夫同志から何とか云はれると、つまらぬ理屈の爲に、忽ち信心を崩して仕舞ます。然るに今善導大師の仰では、假令羅

漢の證を開たものごもが。幾百萬やつて來ても、無上圓滿の妙果を開き給ひたる佛の説法を信じたものが、どうして破られやうかとの仰でありませぬ。猶一步進んで假令初地已上十地の菩薩方が、異口同音に凡夫往生を難じて來ても、夫以上の佛の語を信じたものならば、決して動くべき筈ではないとの御意であります。猶又遙に進んで、あらゆる化佛報佛が光明を放ちつ々、凡夫の往生は成らぬとやつて來ても、一佛の説く所は、一切佛の説く所である、一切佛の説く所は、一佛の説く所である、若も眞實の佛であるならば、此の釋迦佛の説法を信ずる事に就ては、皆ひとしく同觀同證せねばならぬ筈であると、斯の如き大きな見識に住して、決して信心を壊されるやうではならぬとの仰であります。依つて此の七深信に就いては、一深信毎に決定の語があり、其中第六の深信は、第五の深信を廣くお明しなされたものであるから、合して一

つの決定の語を出し給ひ、六決定となつて居ります。決定とは十地論に「信は決定の故」とありて、決定とは心によりすはりの附いたこと、風は吹けども山は動せぬ如く、如何なる縁の風に吹かれても、此の信心金剛の如くゆるぎ動きのない相が決定であります。若此の決定がなけりや深信とは云はれませぬ。

是でざつと七深信、六決定のお話しは仕舞ましたが、此の七深信も詮すれば、最初の機法二種の深信に收まります、七深信が二種深信に收まるばかりではない、此の長々とした至誠心、廻向發願心の三心釋も要する所又此の二種深信に收まりて仕舞ます。此が元祖聖人の思召であります。そこで下の元祖聖人の御私釋の處には、生死之家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能入とす、此の長々とした三心釋をこごとく二種深信に收めてあります。生死之家と云ふは、自



身は現に是罪惡生死の凡夫と云ふ機の深信の御釋を承けさせられて生死の果を擧げさせられ、又无慮无慮乘後願力の法の深信釋を承けさせられては涅槃の因を擧げさせられ、二種深信は實に此生死涅槃の因果であるから、早く自力の企をやめて、無有出離之縁の丸裸となり、無慮乘彼願力と彌陀の大願業力に打ち持たれ、假令天地が覆る例はあらうとも、往生一つは間違ない、念佛の行者には必ず此の堅固の信が具せねばならぬと云ふ、元祖聖人の思召より、善導大師の御懇なる深信釋を長々と引いてお示し下されたものであります。

第八 三心章の下

第三の廻向發願心。此は大經の第十八願の三信の中の欲生心と同じ意でありて、他力の願生心であります。願と云へば何だが自力のや

うに思はるれど、第十八願の欲生心は、信樂を以て體とする如く、今此の廻向發願心も、其の體を云へば第二の深信と別體ではありませぬ。一念の信が彌陀の勅命に向へば深信となり、御淨土に向へば廻向發願心となるのであつても、彌陀の因位永劫に積量ね給へる萬善萬行を、行者に與へて佛にしたいと云ふのが、彌陀の廻向發願心であります。其の彌陀の廻向發願心が、其の儘に行者へ届いたところで參るべきは安養の淨土なりと、親心の難有さが知られて、直に振りの變つた相が行者の廻向發願心で有ります。然れば向ひ處によりて、名の替るのみであつて、體は一つで深信より外はない。そこで次のお言にも、廻向發願心を第二の深信に收めて、此の心深信すること、尙し金剛の若しと御釋なされてあります。金剛の如くしつかり坐れよ、假令他からどう云ふ妨が來ても、一步も退くな、往生がならうか、なるまいかと、弱い二の足を決

第八 三心章の下 一七六  
して踏むな、脇目をしたら落るぞ、願力の大道を踏損なつて、往生の大利益を失ふなど、實に御親切なる御化導であります。上の深心釋の下にも色々の難が来たが、あれは違教の難と云ふて、種々の經論の上から難じて来たのであるが、今度は又違理の難と云ふて、理屈の上から凡夫の往生を難じて来るかも知れぬ。すなはち曠劫以來今日まで、凡夫同士は云ふまでもなく、聖者に對しても罪を作りて居る、十惡も造つたやないか、五逆も作つたやないか、佛に誓つた戒さへ破つた、邪見も起した、身と云はず口と云はず意と云はず造らぬ罪もなく、云はぬ惡もなく、重ねぬ障もない、是等は皆これ三界繫縛の罪である、此の无始曠劫からの永い間の罪が、僅に今世一生の念佛で、汚氣のない界外無漏の報土に往生とはそりや無理である、全く理屈に合はぬ話である、決してそんな理屈に合はぬ法門は、信するななど、云ふ妨難が来るかも知れぬが。

然し彼の世間の物柄の上から考へて見よ、光は能く闇を破る作用がある、空は能く物を含有する作用がある、地は能く物を載せ能く萬物を生ぜしむる用がある、水は能く物を生じ物を潤すの用がある、火はよく物を炙り物を煮、物を焼拂ふの用がある。是等は皆相待の法であつて、相手によりて其の用が一々別であるから、一概には云はれぬ、即ち火は物を焼くから水も物を焼くとは云はれぬ、光は闇を破るが地は闇を破るとは云はれぬ、地は地の特別の用があり、火は火の特別の用があり、水は水の特別の用がある。今もそれと同じ事で、三界に繫縛せらるゝは我等の惡業の用である、此の三界繫縛の我等を憐み給ひて、念佛一つて我等を解脱させて下さるは阿彌陀如來の特別の御用である。家を焼くから火は恐るべきものであると知りながら、其の火がなくては一日も暮されぬ如く、惡業は三界繫縛の恐しき用のあることは知りながら、

うも此の悪業を離れて暮すことの出来ない、淺間敷身の上である、此の淺間敷我等を救ふて下さるは、獨り阿彌陀如來の不思議の御用である、こゝを吾祖聖人は御讚嘆なされて、いつゝの不思議をとくなかに、佛法不思議にしくぞなき、佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり、此の淺間敷我等に對して、彌陀弘誓の念佛は實に有縁の行である。我等に有縁の行であるから、我等は念佛を信するのである、汝は汝の有縁の法を求めよ、我は我に有縁の法を求めん、我等に對しては、獨り此の念佛が、勞少くして、利益多き法であるから、我等は此の念佛を求むるのであると答へよとの仰であります。なんと御懇なる、善導大師の御化導ではありませぬか。

次に信心守護の文として、善導大師が念佛行者に對して一の譬喩を説いて聞かさうと仰られて、二河白道の文があります。此の二河白道

にの文に就ては、以前私が彼の法話誌上で回を重ねてお話致しましたから、今は略します。

以上長々と散善義の御文を引かせられ、既に三心を具すれば他力の願行成就したのである、願行成就の者が、淨土參の出来ぬ筈はないと結ばせられ。次に又善導大師の往生禮讃をお引きなされて、此の三心を具すれば必ず往生する若具せざれば往生はならぬと結ばせられてある。散善義の御釋も禮讃の御釋も、他力の念佛には、他力の三心を具せばならぬと云ふ證文としてお引きなされたのであります。語を換へて申せば、信に離れた念佛では行けぬと云ふ思召である。すつと碎いて申せば、親心の知れた念佛を稱へよとの御意であります。彌陀の御實意の知られた心には、至誠心の相もあり、深心の相もあり、廻向發願心の相も必ず揃ふて居るに違はない。折角念佛を稱へながら、親心の

第八 三心章の下  
一八〇  
知れぬあやふやの念佛では、残り多い事であるその御意より外はありませぬ。

さて此から元祖上人の御私釋の上から、今迄お話しした善導大師の三心釋の御化導に就いてざつと繰返して見ますれば、第一に至誠心とは、眞實心である。ところが凡夫には眞實心はない、外は愚のやうに見えても、内は智であり、外は惡のやうに見えても、内は善であり、外は懈怠のやうに見えても、内は精進と云ふやうならば、そりや出離生死の價値がありませうけれど、内心愚でありながら、外貌ばかり智者振り、内心惡で固めて居りながら、外向きばかり善に見せかけ、内心はなまけながら、外にばかり勉める風に見せかけ、内心虚假をいだきながら、上へばかり眞實らしく飾りて居る、逆も佛になる價値も資格もないものなるゆゑに、此の淺間敷吾等のために、阿彌陀如來が法藏因位の昔に於て、まこと、

まことで固めさせられたお慈悲より、御成就下された本願の行なれば、飾りも繕ひもさつぱり止めて、久遠劫來持前の、無有出離之縁の丸裸となりて、如來の眞實を其の儘頂けとあるが、至誠心の御化導であるぞとの仰せであります。

第二に深心とは、三心を總じてお釋なされたものとして、三心を詮じて見れば、深心一つに收り、其の深心に七深心と七つに開いてあれど、生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の都には信を以て能入とすと、七深心を機法二種の深信に收込んで、生死涅槃の因果をお示し下され、此の二種の深心が往生の正因である、上品と云はず下品と云はず、九品の機類皆此の二種深信がなくては往生はならぬと、善導大師の御化導をお知らせ下されたものであります。本より念佛の行者であれば、念佛は稱へて居りませうけれど、只稱へたばかりでは助からぬ、吾祖聖人の煩